ら、鳥居うちなる水茶屋のお仙が人をひきよする。

第一女聲

日がな一日茶の運び。ほつそり姿、目に立ちて、目許かはゆく美しく、清きは百合かかきつばた。帶しめなほす間もなきに、なぶり心か風までが。第一裾はちらほら脛白し。日もゆふぐれに一ぷくと腰をおろせば、子ども等が、

第三男聲

第二コーラス齊唱

向ふ横町のお稲荷さんへ。一錢あげて。ちよいと拜んで、お仙の茶屋へ。

（お仙）お仙お仙と世にうたはれて、詮も渚のもやひ舟。こがれ寄る邊も數々あり、綱に手かくる浮かれ男、やさ男。

第一コーラス

文の傳へも日に幾度か。どうせかうした垣根の木槿、手折やすしと思ふは道理。

（お仙）さりとはつらや味氣なや。

第二コーラス

眞間の手古奈は身のよい鑑、いひ寄る人の多かる果は、

（お仙）あゝもならうぢやあるまいか。

第一コーラス

土の團子で願ふ身になるはいやいや、いやぢやとて、思ひくづをれ俯向けば。

又もうるさや道行く人の、

第三コーラス

なんぼ笠森お仙でも銀杏娘にやかなやしよまい。だうりでかぼちやが唐茄子だ。

（お仙）茄子かかぼちやか、わしやそりや知らぬ。銀杏娘は楊枝賣る、あの本柳屋のお藤がことか。

第一コーラス

わしは谷中の神の森。あれは淺草御堂裏。

第一・第二・第三コーラス齊唱

拜めば罪も淺草に、世渡る人も群れてよる、一ふじのこの柳腰、見とれぬもの

もなしとかや。

第一コーラス

（地がしら獨吟）

髪を出して長笄の、日髪日化粧伊達姿。藤にまかれて寢たしとは、有馬にあらぬ淺草や。

（お仙）それは理、こちや生でゆく。

第一・第二・第三齊唱

佛神は水波の譬。利益に違ひあらばこそ。

（お仙）それを水茶屋楊枝屋と根ほりはほりの比べ立。聞くもうるさや口惜しや。

第一第二第三齊唱

天の生せる麗質は、磨かざるに美しく、芝から神田に至るまで、佳人お仙といひはやし、半にひかれて詣るとは、知らで惱むか。しをらしや

下

第一第二コーラス

家の名の鍵屋なればか、世の人のかけるかけると思ふなる。

（お仙）かけた覺えのあらばこそ。日毎の文にも、つひしか一度。色よき返書はせぬものを

第二コーラス

噂ばかりが天王寺、塔より高く立つとかや。

第三コーラス（男）

東育ちの名高きお仙ヨイ色を煎じ茶、のみほす土瓶、もとが土ゆゑ、かけたげな。ヤツコセ、ヨンヤナ。

（お仙）出花出花と呼ばれしも、昔のことよ今は早、十九を目前の秋の風。

第二コーラス

娘ざかりは十六七よ。嫁入ざかりも廿まで。二十過ぐれば日尻に皺の、目尻に皺の、

（お仙）より來る人の數ある中に、わしの思ふはかの樣一人。

第一コーラス

神が許してゐるとは知らず、雲に桟、霞に千鳥及ばぬ戀とあきらめて、朝夕にせきあへぬ袖の泪の玉かづら、かけても知らじと胸たぎる。

（合の手）

第二コーラス

春ならで、月も朧に薄ぐもり。幟のはたのはためきに、夜風漸く身にしむ今宵。

（お仙）笛よ太鼓よ、ありや諏訪の森。

第二コーラス

（地がしら獨唱）

つい誘はれて月のなき夜道に立てば、尺八の鶴の巣籠、彼の様の。お仙嬉しく恥かしく。

（倉地政之助出）

（倉地）「そこにゐるのはお仙ぢやないか」

第一コーラス

お高僧頭巾におとしざし、忍び姿が近寄りぬ。

（お仙）おう倉様かなつかしや。

男聲地がしら

夜毎の夢をささやけば、

（倉地）われも變りのあるべきか。思ひは同じ此の二人。これよりすぐに身どもが許へ。

（お仙）勿體なしや。恐ろしや。鄙の育の茨の此の身。

（倉地）いやいや、よろづは此の胸に。

第一第二齊唱

よりそひ歩く二人の姿。翌の日よりは笠森の花の姿は見えざりき。

第三男聲コーラス

花の姿は見えざりき。

（齊唱）人の噂もしづまりし夜の乗物伴つれて出でしお仙は御屋敷姿。眉毛の

笠森お仙

痕は青かりき。

銀杏の稲荷、笠森稲荷に問うて曰く、蓋し聞く、君が地に阿仙といふ者あり、吾が家の阿藤と何れぞ。笠森の神曰く、鎰屋の女阿仙は其の天の生せる麗質地物の上品、琢かずして潔に、容つくらずして美なり。釵梳の長きを戴ず、脂粉の粧を假らず、眞物を眞でみせると謂ふべし。是に於て江都八百八坊、芝から神田に至るまで、佳人佳人と歌ひ、阿仙阿仙と稱す。衆人津液を流し、牛に隨れて善光寺に至り……（原漢文、阿仙阿藤優劣辨、蜀山人作）

三　古劇談

（昭和十三年六月下旬ラヂオ）

1　謠曲の日支交渉物

古劇のお話を致すことになりました。今晩は先づ謠曲のお話を致しますが目下の日支事變に鑑みまして、支那の說話・人物・事蹟等を仕組んだもの一口に申せば支那種のものは、內外二百番中に二十番ばかり、番外にも此の半分ばかりがありまして、ざつと三十番ばかりもありませう。どなたも御承知の鶴龜や石橋東方朔や西王母、猩々、これ等は支那種の祝言物ですが、日支交渉といふには何の關係もありません。美人物の楊貴妃や、此の美人の出る皇帝、また虞氏の出る項羽、または胡へやられた王昭君を仕組んだ昭君、これ等も日支交渉には關係がありません。よく知れ渡つてゐる邯鄲の如きは例の大きな望を立てて都に上る青年の盧生が粟飯を炊く間の夢に、貴い位に卽いていろいろの歡樂に耽ります

が、覺めて見れば五十年の榮花もたつた粟を炊ぐ間の夢に過ぎないと悟るといふことで、此の話は日本文學によく取用ひられたものであります。百四五十年前に黃表紙と申しまして諷刺滑稽等を旨とした小說が大いに行はれまして其の中に「金々先生榮花夢」と題するものがありました。傑作として名高いものでありますが、やはり此の邯鄲から趣向を取つたものでありました。此の類はまだまだありますし、輕業の綱渡りにも「邯鄲は夢の枕」といふがあり、消防の梯子乘にも邯鄲はありますが、少しも日支交涉にはふれて居りません。

日支交涉物といつたら、先づ白樂天でこざいませう。白樂天は唐時代の大詩人で、此の人の詩や、文章は我が國の文學に大きな影響を及したものであります。此の點では支那人中で白樂天に及ぶ者がありません。此の白樂天が支那の帝から日本の智惠を計つて參れと仰を承けて船に乘つて參ります。肥前の松浦潟の沖合に參つて碇をおろして樣子を見て居りますと、こちらから漁夫の翁が小舟に乘つて參りました。白樂天の方から呼びかけました。「これは日本の者か」「左樣、日本の漁翁です。御身は唐の白樂天ですな」白樂天は驚いて「不思議、不思議、始めて渡つて來たものを白樂天と見て取るとはどうしてのことか」と問ひます。漁翁は「もう、とうから其の名が聞えてゐるので、いつたまでだ」とそらします。白樂天は「それにしても直ぐ見破るとは不思議だ」と疑ひます。漁翁は少しばかり正體を現して「日本の智惠を計らうといふので、白樂天がやつて來るといふ專らの噂で、西の方から來る舟を見ると、そりや來たと、みんなが目をつけるのだ。別に不思議もあるまい。詰らない問答より釣でも始めようと絲を垂れさうにします。白樂天はもつと尋ねたいことがあるといつて舟を近づけまして「日本では近頃どんな事をして遊ぶか」「唐土では何を遊ぶか。」「唐では詩を作つて遊ぶよ」「日本では歌を作つて、人の心を慰める」「歌とは何か」「別なものではない。天竺の陀羅尼が唐土の詩になつた。其の詩に當るものが、こちらの歌で、三國を和らげて來たので、大きに和らぐ歌と書いて大和歌と讀む。お前はようく知つてゐるが、わたしを試めす爲に聞くのか」といひます。漁翁の詞には冒すべからざる威嚴があります。白樂天は驚きましたが、其の鉾先をよけて「今こゝで目の前に見る景色を詩に作つて聞かせよう。青苔衣を負ひて巖の肩にかかり、白雲帶に似

て山の腰をめぐる。分つたか漁翁」と、白樂天は得意になつて、蒐つて來ます。漁翁は「青苔とは青い苔で、それが巖の肩にかかつてゐるのが衣に似てるといふのだらう。それで又白雲が帶に似て山の腰をめぐるといふのだらうが、面白い面白い。日本の歌も全くそれで、こんな風にいふ。苔衣着たる巖はさもなくて、衣着ぬ山の帶をするかな」と、表現はごく簡單に、味ひはたつぷりに作つて見せました。白樂天は驚いてしまひました。そこでおまへは何といふ人かと名を尋ねますと「名も無いものだが、歌は人間ばかりが詠むものでない。花に鳴く鶯、水に住む蛙もよむ。唐土のことは知らないが、日本では翁のやうなものでも一通り歌は詠む」といつて、それからいろいろの例を擧げて聞かせ、とても和國の遊びの和歌を謠つて、舞の面白いのを見せてやらうといふので中入にあります。漁翁はもと和歌三神の第一と仰がれる住吉明神が假に現れさせ給うたのであります。日本國威の爲に漁翁と現じて、白樂天を凹ませて追ひ返されるのであります、追ひ返すにしても舞を見せてやらうといふのです。今で申せば、敵の斥候兵を捕へたが、大いに日本の強い所を見せて驚かせ、これでも食べて行けと、パンをくれて返してやるやうなものです。中入の後に住吉明神が神の御姿を現はし「住吉の神の力のあらん限りは、日本をば從へることは出來まい。はやく立歸れ樂天」と仰せられて、伊勢石清水賀茂春日、鹿島三島諏訪熱田諸神も現はれ給ひ「神風に吹きもどされて唐船はこゝより漢土にかへりけり」といふ仕組であります。

人によりましては、之を平安朝より鎌倉時代を通じて、白樂天の詩文に支配されましたが、室町時代に入つては白樂天の束縛を脱して、禪宗が榮えると共に、宋の蘇東坡や黄山谷の詩文に耽けるやうになり、自國を主にして、連歌や和歌が榮えた。其の反映である。とかう解釋致します。それも一つの見方ですが、又他に一つの見方があります。それは本當に支那が日本に攻め寄せて來た時の氣休めに作つた曲だらうといふのであります。私は其の主張者であります。應永廿六年五月下旬のことである。九州の方から警報が都に達しました。それは大唐と南蠻と高麗とが合して日本へ攻めて來るといふ知らせで、それを高麗から告げて來たといふのであります。神の國である日本に、何事があるものか

と考へた人もありますが、室町將軍をはじめ、都中がびつくりしました。噂は噂を生んで騷はだんだん大きくなりました。出雲の大社では夜中一二萬人の聲がして、夜が明けると、神殿内に血が充ち滿ちてる、神劍には血が附いてゐたと告げて來るかと思ふと、西の宮の夷の宮が震動して廣田社から軍勢がくり出した中に、女騎馬武者が一人あつて、それが大將らしかつたといひます。それから石清水八幡の石の鳥居が風も吹かないのに倒れました。しかもそれは將軍義持が參籠中の出來事でありました。さあいよいよ大騷ぎとなつて、諸々の社寺に祈禱が始まつた。北野御靈が西方を指して飛ばれたといふ、美濃の南宮の社壇も鳴動したといふ。そこに唐軍勢の先陣の船との間に合戰が起つて、大内の若黨が海の上に進發したと傳へました。これは高貴の御方の日記、看聞御記にかう見えてゐます。蒙古襲來の時の神風が再び吹き拂はうとは確信しかねて武士といふ武士は落ちついて居られませんでした。月を越えて、七月十六日には熱田宮に希代の怪異が起りました。暴風雨の夜に海の面二十町ばかりが明るい程の大きな光り物が社頭に飛入り、其の路に當つた家はみんな倒れてしまひました。少女に神憑りがあつて、其の託宣によれば、伊勢の神様の御影向で、異國退治の爲であり、八幡様も御影向になつたと申します。其の二十日には薩摩に戰が始まつて唐人には鬼の形をしてゐるものがあるので、到底人力では叶はない。何しろ船は八萬艘からあつてなどといふ評判でありました。その内に唐船が一艘兵庫港に着いた。それは使の乘つてゐた船で、來狀が甚だ無禮である。所詮元寇の時の如く追歸すことに定められたと、滿濟准后日記に記してあります。武士達の心配は非常のものであります。月の廿六日には、少貳大友菊地以下の武士は、對馬に於て侵入軍と決戰致しました。わが軍は見事に勝ちまして敵の將軍を二人まで生捕りました。祈りに祈つた大風が吹き出して唐船二萬五千艘が海に沈んでしまひました。此の報告が八月六日になつて參りました。天下は大喜びで、將軍も悅べば、陛下の御所へ參賀の者が絶えませんでした。此の侵入に對して都の心配は七十餘日に及びました。私は白樂天の曲は此の憂悶中の氣休めに作つたものか、それでなければ擊退直後の喜の能として作つたものかと思ひます。此の頃は能の大成者世阿彌といふ人が花傳書といふ名高

い書を書いてゐた時で、作の腕が最もすぐれてゐた時であります。此の曲は古來世阿彌の作として傳へて居りますが、それを信用してよからうと思ひます。

此の白樂天に代へるのに唐土の天狗を以てしたものは善界であります。これは大唐の天狗の首領善界坊が我が國へ渡つて、佛法を妨げようといふのでやつて來まして、先づ愛宕山に入り太郎坊に案内をさせて比叡山に參りました。天狗同士のことですから雲の棧を通つて時の間に參ります。丁度其の時比叡山の一僧が勅命を受けて山を下り、一乘寺坂の下り松の邊に來ますと、急に嵐が烈しく、吹いて雷雨が夥しく、山河草木が震動致します。こは何としたことであらうと驚いてゐると「そもそも是は大唐の天狗の首領善界坊とは我がことなり。あらものものしや如何に御坊」と名乘りかけて現れました。僧が不動明王の咒文を唱へました。すると、明王が現れ出で、矜迦羅制多迦二童子を從へて降魔の力を合せて御先を拂ひ、山風神風が吹き拂へば、男山八幡・松尾・北野・賀茂諸社のあるあたりも見え出しましたので、さしもの天狗の飛行の翅も地に落ちて、もう二度と再び日本には來ないといつて天狗は雲路を遁げ歸るといふ筋であります。

これは平安朝の末に出た今昔物語にある話を本にして作つたものでありますが、作者は竹田法印といふ人で、天狗の出の烈しい所が見所になつて居ります。やはり此の應永二十八年の來寇に關係を有つ作かと思はれます。

右の二つの作は非常事變でありまして、彼から押寄せて來るのであつて、神國日本が如何に強く、小勢を以て如何によく大軍に當つて勝つかを說くものでありますが、日本人は決して強いばかりで、人情をわきまへないやうな木や石ではありません。十分に同情を有して居ります。決して支那の良民を苦しめるものではありません。誤まつてゐる政見の所有者の率ゐてゐる軍を打懲らすだけであります。又支那だところで、人情といふものを辨へてゐないものばかりではありません。其の點を明かにするものがあります。能の唐船がそれであります。

唐船もやはり此の應永の侵入事件の後日譚を仕組んだものと認めます。一とせ唐と日本と船軍の時、筑前筥箱の領主すなはち筥崎殿に船一艘捕獲せられて、其の船に乘つてゐた祖慶官人が、筥崎殿に使はれて野原で牛や馬を飼つて居

りました。いつしか十三年の月日がたつて、祖慶は忍び妻に子どもを二人設けました。祖慶は唐にも男の子を二人持つて居りました。此の唐に置いて來た子ども二人は父が生きてゐることを聞いて、筥崎まで迎にやつて參りまして、筥崎殿に其の事を申し上げました。話が變つて、祖慶はこちらで設けた子ども二人を伴れて、牧場から歸つて來ます。その途中、子どもが問ふままに、唐は日本よりずつと大國で牛や馬も飼ふ樂しい國だが、お前たちが出來てからは、唐へ歸らうなどとは思つたことも無いと語つて筥崎へ參りました。筥崎殿は之を待ち設けて、祖慶に「遲い歸りやうだな、先づお前に尋ねたいことがある。こちらへ來る前に二人の子どもを唐に置いて來たな」「左樣でござりまする」「名はそしん、そいうと云ふだらう」「これは不思議、どうして名を御承知でございますか」「お前がまだ生きてゐると聞いて、色々の寶に換へてお前を申請け、國へ伴れ歸りたいといふので子ども二人が迎に來てゐるのだ。」「これは思ひも寄らぬ事でござりまする。其の船はどこに居りまする」「あの船が子どもの乘つてゐる船だ。行つて對面しろ。」其の對面があつて、唐から迎に來た子ども二人は父を伴れて歸らうと致します。日本で出來た子ども二人は一しよに伴れ歸つて貰ひたいと取附きます。けれども、それは筥崎殿が許しませぬ。日本の子どもは、撫子の花に色の濃い薄いの違はあつても、種は一つの花と花だ。情無いといつて泣き叫びます。祖慶は別れ兼ねて船に乘り移らうと致しませぬ。唐から來た子どもは、時刻が移る。急いで船に乘れと促します。兩方の中に挾まれて、祖慶一人が途方にくれてしまひましたが、親の子を思ふは人間ばかりに限つたことで無い。燒野の雉夜の鶴、梁の燕も皆それだ。年取つた身は明日の命も分らない。もう此の上は此の身一つを棄てようと巖の上にあがつて念佛を稱へて海に身を投げようと致しました。日本の子二人、唐の子二人が、祖慶の左右に取附いて泣き悲しみますので、祖慶の心もよわよわとなつてしまひました。筥崎殿は之を見てもつともはやはや暇取らするぞ。歸國を急げとのことに、親子五人は追手の風に喜びの帆をあげて勇み勇んで唐さして急ぎます。といふこれが一篇の筋であります。

こんな譚は此のたびの如き聖戰にあらうとは、思ひません。けれども平和克

復の間際にはどんな人情話が湧かうも知れません。固より良民を敵とするのでなく、相與に黄河の洪水を防がうといふ程なのでありますから、其のうちにはこんな入組んだ事件も湧きませうが、何れに致せ、今より十年二十年後のことでありまして、それが他の一面から考へますと、東洋の平和、東洋の幸福をわが日本が保證することにある其の曉だと解せられます。私は未來永遠をかけて此の話には深い意味が包藏されてゐて、一通りの人情譚でないことを考へるのであります。一體隣邦に支那を持つといふことは、日本の負擔をいつまでも重くすることでありまして、今回の事變によつて我々の覺悟は愈々大且つ重であることをつくづくと考へなければなりません。

日支交渉物は此の三つの曲位でありますが、他に「羊」といつた面白い支那種物もありまして、わが日本の歌舞伎にしてもよいものの一つです。先年帝國劇場で之を仕組んで演じたこともあります。親に分れて他國をした者が久しぶりに歸國しますと、不思議な高札が立つてゐます。王様の羊が盗まれた。此の泥棒を知らせる者には望次第の褒美をやると書いてあります。變つた高札だと思つて家に歸つて見ますと、一匹の羊がかくしてあつて、王様の羊を盗んだのであるが、貧乏な爲だ。」と父が語つて聞かせました。息子は急用が出來たから出かけるといつて家を出ました。さうしてどうでせう。子は親の爲にかくすと申しますのに、それとは反對に盗人が分りまして何の某ですと知らせました。盗人夫婦は直に捕へられました。男の方は冒した罪の報だとあきらめましたが、妻の方は今はの際にどんな奴が訴人をしたか、一目見て死にたいと願つて行つて見ますと、意外にも訴人はわが子でありました。大いに驚きますと息子は早速御約束の御褒美を下さいと王様に願ひ出しました。約束通り何でも遣すとの仰に、それなら罪人二人を私に下さいといつて貰ひうけ、親子三人が喜んで家に歸るといふ筋であります。比較的新しいもののやうですが、喜劇としても見られるものであります。此の類の面白いものも支那種の中にはあることだけを申して今晩は講演を終ります。今は戰つてゐましてもさすがは古い國、話の多い國で、平和克復の曉にはお互に親睦を重ねまして、採つてよい話は宜しく採つて芝居とか小説とかの材料とすべきでありませう。物は窮屈に考

へない方がよいと思ひます。

2　狂言の笑

お能一番と一番の間に狂言をはさみますことは御承知の如くです。これはお能がとかく哀れつぽい物が多いので、狂言を挾んで氣分を轉換させようとするのであります。御承知の如く狂言には笑はせ物が多く、氣分を快濶にするには最も適してゐるものであります。またお能には其の世のことを仕組みます物もありますが、それは極めて少く、多くは歴史上著名な人物事蹟を仕組みます。最も多いのは平家物語の中に出る人たちで、義經辨慶、嗣信忠信、平家では知盛忠度敦盛、女では祇王・佛・靜等が出るのです。狂言は全く之に反しまして、室町時代の人たちの行動を仕組みまして、材料の上から見れば一種の世話劇社會劇の簡單なものでありました。

狂言に使用した材料は先づ大名物。次は出家山伏物・すりすつぱ盗人物・低能者物・不具者物・醜婦物・神佛精靈物・唐人物などありまして、當代諸方面から材料を取り用ひて居ります。

狂言は彼是二百三四十番もありませうが、何れも笑を喚ぶものばかりでして今晩は其の笑のよつて生ずる所を極めて平易に述べて見たいと思ひます。第一は反覆による笑であります。同じ事が繰返されるとつひ笑ひ出してしまひます。ここに一人の老人がありまして、石に躓いて路の眞中で轉んだとします。氣の毒だと思つて人が見ます。二足三足歩いて又轉んだとします。年の若い婦人方には之を見て笑ひ出す方があります。老人は杖を力に立ち上りましたが、又三足四足歩いて轉んだとします。今度見てゐるものは男女を問はず一齊に笑ひ出します。もつとも怪我でもしたのですと、笑ふ所ではなく駈寄つて手當を致すでせうが、怪我を少しもしない場合では觀てゐる者が笑ふばかりでなく、轉んだ人自身も笑ひ出すものであります。かうして全く同一の事が反覆されると、つひ笑を喚び起すのであります。口眞似などは甚だにくらしいものですが、いつまでも口眞似をすると、つひ笑つてしまふものでございます。狂言には反覆を仕組んだものが相當に多い。かの「口眞似聟」が其の例で、聟入をする者

が禮儀作法を心得て居りませんので、物知りにたづねますと、なに先方のする通りにすればよいと至極手輕に教へてくれましたので、其の積りで參りまして使用人の冠者のいふこと舅のいふことと一切を口眞似しました。舅がたうとう腹を立てて蒐れば、壻も其の眞似をして摑み合ひになりましたが、舅の方が強くて壻を轉がして這入ります。すると壻が冠者の耳たぶを取つて引き廻し、うち轉して這入るので見物人が笑つてしまひます。「吟壻」も此の類で挨拶の仕方を習ひに行きますと、此奴惡戯好で挨拶の切れ目ごとにフンと云へと教へます。參つて其の通りにやります。舅は壻が當世者だといふのでやはりフンを附け、酒盛りにも散々フンを附けて、おしまひに二人で合舞をしてフンといつて別れるといふものであります。御伽話にいふ馬鹿壻のことでありまして、狂言に少からずあります。もう一寸複雜なのを例に取りますなら「長光」がようございませう。田舍者の太刀に目をつけてすりが取りかけた所へ目代がやつて來ます。兩人は共に自分の物だと主張し、目代が裁判をしまして、先づ刀の作り出された所、卽ち出處を問ひ、刀の銘を問ひ、膚合を問ひます。田舍者が先づ答へますが、聲が高いので、よく聞取つて、すりが其の通りに反覆します。田舍者もやうやく氣づきまして、寸尺のことを問はれると、目代の耳に口をあてて小聲ですりの分らないやうに二尺五寸と答へました。すりは困りまして、寸尺は備前、ながは長みつは光などと答へます。目代はここな狼狽者め寸を申せといひます。すりは霜月師走の薄氷でござりますと、膚合を答へますので、つひばれてしまつて、逃げ、やるまいぞやるまいぞと追入になつて了ります。

次にははきちがひも亦笑の種になります。はき違ひは意味を取り違へる事であります。果物の九年母を屆ける使が、途中で一つ落してしまつた。數へて見るとまだ八つあるので、ははあ九つあるから九年母、八つなら八年母だとかう考へて、先方へ行つて八年母を屆けますといつて、ばれた話ははきちがひでありますが、狂言では、もう一寸複雜に出來てゐます。大抵はこじつけるのですが、其のこじつけがひどい程面白いのです。末廣がりがよく行はれますのも其の爲です。末廣がりは末廣とも申しまして扇のことであります。ある大名が振舞の引出物にしようといふので、太郎冠者を都へ買ひにやります。冠者は末廣が

りといふものを見たことがなく、聞いたのも今が始めてであります。何でも欲しいものは喚めいて廻れば手に這入るものと考へて、末廣がり買はう、末廣がり買はうと呼んで廻り、すりに引つかかつて傘を賣りつけられて歸るのが此の狂言であります。傘は明ければ成程末廣がりになります。其の外要元や紙やざれゑ(狂畫)なども注文に合せて見ました。ことにざれゑは傘の柄で冠者を打つてふざけて、これがざれゑだと教へるのでした。冠者はその通りに信じて歸つてざれゑをやつて大名に叱られますが、すりに流行歌をならつて來ましたので、それを謠つて大名の機嫌をなほすのが此の末廣がりの狂言でして、二人で謠つて舞つて鰻のすしを頰張つて、善うか酒を呑めで終るものでして、祝言物に用ひられます。もつと念入なのは「粟田口」であります。當代の大名たちは兎角放心で非力で我儘で、武藝には精を出さず、日常を寶比べだの獵だのに費すものが多かつた。其の寶比べに粟田口の作の刀を出し合ふことになりました。大名が冠者を都へ買ひにやります。冠者は粟田口とは何のことだか知りませんので呼買をします。すりが聞いて自分が粟田口だと名乘つて、冠者に伴れられて大名の許に來ました。大名が伯父さんからの註文書に合ふかと冠者に命じて訊ねさせます。すりはうまく附會ける。引拔いて鋒元黑かるべしとあるがといへば、繻子の脚袢をはいてゐるので黑いといふ。身が古るかるべしとあるがといへば、生れて此の方風呂へ這入つたことが無いと答へます。又刄が堅かるべしとあるがといへば、若い時には岩や石でも嚙みわりました。今でも茶臼の二つや三つは嚙みわりますと答へる。又上作には兩銘あるべしとあるが、といへば、はい私は上京に姉、下京に妹を持つて居りますが、どちらも女の子を持つて居りますと答へました。大名は大喜びで召抱へ、伯父さんが一刻も早く見たがつて居られるといふので、冠者は家に止め、粟田口ばかりを伴れて參ります。途中腰の大小を粟田口に持たせて、後からついて來させますが、粟田口ゐるか居りますと繰返して行くのに、粟田口ゐるかと節を長くして呼ぶ時にすりは大小を持つて遁げてしまふ狂言であります。すりやすつぱの狂言には此の類が多く、太郎冠者も馬鹿なら、大名も馬鹿です。「大名の三代目」といふ諺もありまして、大名には斯樣な人が多かつたと思ひます。そこで諸君が「それでわかつた。狂言に

は大名が馬鹿で、太郎冠者が賢いやうに作つた物が澤山ある。詰り大いに愚弄されるわけだ。それを喜んで見物してゐたとすれば、餘程の馬鹿うつけでなければならぬ」とお考になるかも知れませんが、それでは少々わけが違ひます。大名にしてもさう馬鹿者許りではありません。何を申すにも弱肉强食の戰國時代です。油斷もすきもなつたものではありませんが、とにかく武士の光つた時代です。同時にさう貧乏なものばかりでもありません。何物でも入用とあれば腕で取つたものでした。まごまごしてゐれば人に取られてしまつた時代です。實際を申すと、貧乏なものはお公家樣でありまして、着る着物も無かつたのでありまして、夏客が來ても着物がなくて、蚊屋をまとつて逢つた人もありましたが、はたから見ては笑はずには居られませんでした。此の貧乏狀態をどうして狂言作者が見遁しませう。早速公家が生活に困つてゐる樣を作つて京都の近くの伏見で演じました。お能の大成される應永年中のことです。當時伏見にはお公家衆が多く住んでゐまして、早速この狂言がとがめられて、それがもとで、たうとう矢田といふ能の家が絶えることになりました。そこでお公家さんを大名にしかへて演ずることになりました。大名連は之を見まして「はははあ、あの貧乏は大ていお公家衆だ。大名にも貧乏なものもあるにはあるが、自分はさうでない」と、自己優越感の下に喜んで見たのでありました。

とは申せ、太郎冠者が大名を愚弄し、小僧が和尙を凹ませる。卽ち下の者が上の者を弄ぶ所の下剋上が當代の一般の世相で、强かるべき大名が弱くて、無學無智な、冠者の方がえらい。又學問のあるべき出家が無學で、かりうど（狩人）と問答をしても負け、驗のあるべき山伏が祈りをしても一向利かず、事相の顚倒が人の笑を喚ぶのでした、この顚倒による笑が狂言に最も多く、著名な作も一ばん多いのでありました。これについて、もつともつと說明致しませう。太郎冠者を伴れて上京の萩の花見に行つた大名があります。歌一首を所望もされようからといふので、冠者が「七重八重九重とこそ思ひしに、とへ咲出づる萩が花かな」と教へて行くのですが、冠者が身振や手眞似で教へます。その時にはどうやら歌になりましたが、短冊を出された時には冠者が其の場に居合はせず、さあ大名がどうしても結びの句が思ひ出せず、「太郎冠者が向臑に某が鼻の先」といつて笑はれ

るのですが、これが萩大名です。まさかにこんな大名もありますまいが誇張したら、こんな大名もそちこちにあつたことでせう。連歌や和歌の盛んな時代だけに可笑しい。全く誇張して作つた狂言です。誇張も度を過すと笑を喚び起すものであります。賢かるべき大名が闇愚で、劣つて居るべき使用人が賢いといふのでありまして、これは顚倒による笑でありますが、これには誇張の方がもつと笑を呼んで居ります。もう一つ誇張による笑の例をあげませう。大名が冠者を伴れて遊山に行く道で猿まはしに逢ひました。大名の矢を入れる靫がはげて居る。よつて其の猿の皮を借せ、靫に張り、四五年たてば返す。借さなければ此の弓で射殺すといひます。猿まはしは是非がない、大名のわが儘には勝たうやうがないとあきらめて、猿に因果を含めて殺さうとします、猿は藝の催促だと思つて舟の櫓を押して漕ぐ眞似をします。大名は之を見てかはいさうだもう殺すに及ばぬと申します。そこで其のお禮の積りで猿におめでたい歌に合せて藝をさせますと、歌の一つづつに、大名は刀をくれ、上下をくれ、扇をくれ、みんなくれてしまつて、たうとう裸になつてしまふのが靫猿（うつぼざる）であります。是は誇張に基づくものです。總じては顚倒物が多く二人大名（にんだいみやう）など面白いものが澤山あります。

出家の無學を仕組んだものも數多くあります。出家は當時最も學問があつたのですが、それを無學にして笑はせたものです。しかし俄出家もありまして實際困つた者もあつたのであります。一體出家は上納はしなくてもよし、人夫にはつかはれず、行脚には自由に出られるので、出家程樂なものは無いのでした。そこで困ると頭を剃ることにしてあります。お經も知らず、說教は勿論出來ないものが多かつたのでせう。說教をした所で、感動して泣く者が無くては張合がない。そこでお布施は山分けにするといふ約束で、泣き役の尼を一人雇つて先へやつて置きました。所が說教が哀れな所へ行かないのに、尼はどつとと泣出しました。說教のやりにくいつたらありません。やうやう一くさり說き了つて歸りました。其の途で、泣くのが早過ぎたから、約束通りには泣賃は拂へない、いや拂へと爭ふのが泣尼といふ狂言です。又小僧にしてやられる狂言が少からずありまして、地頭の前で和尙が女犯をすつぱ拔かれるのが公事新發意（くじしぼち）、小

僧が女に寢代つてゐて、和尙にいろいろな藝をさせて、鯛の眞似をさせ、鯛の鳴聲を出せといはれて、和尙がたひたひといつて廻るのが寢代の狂言です。和尙は必ずしもこんなお人よしばかりではありません。詰り顚倒と誇張とで笑はせるのです。手負山賊の和尙なんかは山賊に金を出せといはれて、無いと斷り、そんなら衣を脫げといはれたが、たつた一枚の衣でそれも困る。其の代りに肩を打つて按摩をしませうといつて、長刀を下に置かせ、油斷を見すまして山賊の咽笛を剃刀で搔切つて前の谷へ踏み落します。さて和尙麓に下つて、とある家に宿を賴んでゐると、亭主が歸つて來ました。今日は油斷をしてやられた。疵は淺さうだが、やつと歸つて來たといひます。女房はもしもの事があつてはならぬ。幸ひ奧に坊さまが來てゐられますから、御祈禱を賴みませうといふことになりました。見れば今切りつけられた和尙です。おのれ坊主待て、打殺してくれうぞ。どこへどこへ。やるまいぞやるまいぞ。といつたやうな作もあります。

他に山伏の祈の利かず、蟹に挾まれてゐるのを祈り放してやらうとして、自分の耳たぶを挾まれてしまふのが蟹山伏、柿を盜に木に上つてゐて、木主に散々にからかはれて、鳶に似てゐるといはれ、飛ぶ眞似をして木から落ちるのが柿山伏こんな類が大分あります。他に盲の座頭をなぶる狂言もあり、乙御前すなはちお多福を仕組んだ狂言もあつて、業平餅、釣女、かくずゐなど名高い狂言もあります。

かう述べますと、狂言は全く笑はせもので事局にふれた物などありさうもないと思はれます。御尤ではありますが、やはり二つ三つはあります。之を申して講演を了りませう。お能の唐船は唐人子寶と題して狂言にも作られてゐます。大藏流や和泉流には無く、鷺流で專ら演じました。唐に置いて來た子どもが持つて來た數々の寶を拍子にかかつて謠ひ數へる所で終ります。一風變つた唐人の服裝や言葉が珍しかつたのでありませう。もう一つ茶盃拜と申す狂言があります。「我十ケ年以前に日本へ捕はれ、箱崎の裏に住居せり」といふ捕はれ人が、日本人を妻としてくらしてゐましたが、やはり應永廿六年に入寇して捕虜になつたものらしいのです。此の男が時に「日本人無心、自我唐國妻戀」といひます。日本人は無情だ。自分は唐のもので妻が戀しいといふことですが、女房

には何の事だか分りません。そこである物識にたづねますと、茶や酒を飲まなくて悲しいといふ意だ。隨分御馳走をしろとのことに、酒の用意を致しました。夫婦とりやりを致して二盃三盃と重つて、女房が肴に謠をうたひ、唐人はスウランドン、ホコイテウ、ブスガンナンなんかと唐音で歌をうたひます。次に舞になつて、唐人が日本人無情、自我唐國妻戀をやり出しますと、女房は怒つて「もはや勘忍ならぬ出て行け出て行け」と追ひ出すといふ狂言であります。

もう一つ唐人相撲といふものがあります。日本の相撲取りが唐土に渡つて多年取つて廻りましたが、歸國することになつて、お暇乞に帝王の所へ出ました。別れに一相撲といふことになつて取り出しました。相撲取は帝王の臣下一同を投げてしまひました。此の上は自分が相手になつて遣はさうが、身に接近させるのが忌だと、王は荒莚を體にまきつけます。これが一々通辯附で、ケイラン・イチヤメ・ミコライだの、カリライ・テウスンキンなんかと珍奇な言葉が出て來て諸人を笑はせます。王は莚に孔を明けて兩手のはひるやうにしました。さて音樂に合せて取り出しました。日本の相撲は其の孔に兩手を入れて王の兩手を掴みまして、王を散々に引廻し、地面にどつと投げつけました。お側の家來や見物してゐた家來どもはかけ寄り王を抱へ、唐言葉でぺちやくちや喋つてはひります。其の王の恰好を見たら笑はずには居られますまい。何だか目下の大事變の最終を物語るやうに思ひますが、どうでせう。

3　元祿劇の御家騷動物

今からざつと二百六十年、ばかり前、元祿時代は文學音樂演劇類の盛況を呈した時代であります。漢文學では新井白石・伊藤仁齋・荻生徂徠等大家揃の時であり、平民文學の方面では俳諧の松尾芭蕉、小說には井原西鶴、淨瑠璃脚本には近松門左衞門、いづれ何百年にしてやつと一人が出るといつた大家揃の時代です。

それで、演劇方面と限りますれば、第一に演劇の作者、第二には役者、第三には舞臺、第四には見物人を考ふべきですが、元祿時代は此の四つのものが急に進歩しまして、夜の花火のぱつと中空に發いたが如くでありました。特に役者にすぐれた者がありました。江戸の初代市川團十郎に中村七三郎、上方では坂田藤十

郎に水木辰之助芳澤あやめ、大阪には嵐三右衛門、いづれも特技を有つて舞臺に立つた立派な役者でありました。しかも此の人たちが其の土地の見物人の好みに合するやうな技術を持つてゐました。江戸と上方とが役者を交換することも行はれましたが、江戸に無かつたものは若女方であり、上方にないものは荒事仕で、初代團十郎の如き勇ましい技を演ずるものがありませんでした。自然狂言の筋も變りまして、上方の狂言は仕組が複雑で、理窟詰であり、見物は見巧者で批評もやかましうございました。江戸の方は大ざつぱでして、切つた張つたといつたやうな荒々しい事を好みました。

狂言の仕組から申せば、義經狂言、曾我狂言、勇ましいのでは四天王狂言、濡つぽいのでは傾城買狂言、複雑なのは御家騒動狂言でした。今日は其の御家騒動狂言に就いて申します。御家騒動物の標本は、近頃では仙臺萩でせう。政岡の飯炊場、外記と仁木彈正との對決場が、すぐに思ひ出されまして、殿様の亂行から藩中に正邪兩黨が起つて、後嗣問題を論じ合ひ、毒殺謀殺等の忌まはしいことが續出し、遂に公儀に裁判をして貰ふことになります。さうして辛うじて正義派の勝利となつて御家は安泰といふことになるのであります。もつともこれは近代の事でして、元祿時代はもつと簡單でした。對決場などは出さず、見せ場は廓場でして、遊女と口説をします場面、立派な家の若殿様が放蕩の擧句、家からは勘當同様になり、落魄して今のぼた屋のやうな者に成り下ります。それでも馴染の遊女が戀しさに其のおちぶれ姿で廓へやつて來ます。此のおちぶれ姿を略と申しまして、之を演ずるのが得意な役者もあり、上方では坂田藤十郎の特技でありました。藤十郎は近年で申せば中村雁次郎でして、あれをもう一段上品におつとりとさせたやうな藝の持主でして、當時上方役者の代表者です。つひ最近に演じました「藤十郎の戀」と題しましたあの狂言は、此の藤十郎が人に戀を仕掛かけられた時の演じ方に精進しようと思つて、僞つて茶屋の女房に愛情を抱いてゐるやうに見せかけ、いよいよの場になつて遁げてしまふ所を演じたものでした。これは別に御家騒動物ではありません。私は藤十郎の藝は寫實が基礎であつたといふ例に引くまでもでございます。

寫實が基礎になつたとすれば、上方は上方風、江戸は江戸風とはつきりと區別

があるべき道理で、元祿には事實其の區別がありました。初代團十郎は一度しか上方へ參らず、坂田藤十郎は一度も江戸へ下つたことがありません。これは自分の藝を知つて居つて、いひかへれば、自重して輕々しく動かないといふ藝道の嗜を有してゐたのであります。金さへ出せば何處へでも行くといつたやうな陋劣な考は持つてゐなかつたのであります。此の時に當りまして、江戸役者で上方へ乘込んで、坂田藤十郎が得意の傾城買の狂言を壓倒して幾年もの間評判を取りつづけた名人があります。それは江戸の中村七三郎です。七三郎は小柄な男でしたが、好男子でした、上方人の好みにも合した男でした。此の男が大いに當てましたのは

傾城淺間嶽（けいせいあさまだけ）

と申す狂言でした。傾城は遊女狂言であることを示す文字であります。七三郎は元祿十年に京都の山下半左衞門の座に參りまして、二の替り狂言に之を出したのでした。當時上方では空前の人近松門左衞門が作者として、坂田藤十郎等の爲に作を致して居りましたが、江戸から來た中村七三郎の其の狂言に押されてしまひますので、工夫に工夫を凝しまして、江戸から歸つて來た若女房の名人水木辰之助に子持高尾の狂言をさせて張合つて見ましたが、それでも對抗が出來ず、永い間壓倒されたものでした。七三郎の當てた原因は、寫實派の用ひるあらゆる形式と趣向とを取入れて、破綻の出無い演出をして見せた爲でありました。先づは元祿を代表する名狂言の一つであります。種類から言つたら何の狂言で、其の仕組はどうだつたのでせうか。これは御家騷動物で、仕組は甚だ複雜で、後の淨瑠璃所作事は幾つとなく此の狂言から出て居ります。今其の筋を申す前に、御家騷動物狂言の性質に就いて略說をいたしませう。御家と申すは農工商の庶民のことでなく、大名高家といふ意に用ひてあります。騷動は何によつて起るかと申しますれば、多く跡取の競爭であります。大名家の殿樣が一通りの方で、子どもが本妻の腹から生れて居れば問題は無いのですが、本妻に子どもがあつても、本妻が早く歿して、後妻が自分の生んだ子か弟かに家を嗣がせ、本妻の子を廢嫡しようとするので、騷動が起ります。元和偃武以來最早五六十年になりまして、實戰の經驗のある武人はだんだん歿して行きました。今の

人たちは父祖の功勞によつて、知行を貰つて寢て食つてゐたものであります。上は將軍大名より、下は身分の低い武士までがそれでありました。太平の御代でありますから、年毎に驕奢が募りまして、上下一般財政難に陷つてゐた時であります。榮えたものは芝居に遊里でありました。之を見、之を買ふ蕩樂は上から下までがやつてゐたことでありまして、大名の若樣が遊女に耽つて勘當をされたものも少からずありました。若樣でなく、大名自身にもありました。こんな時代でして、御家の騷動は大抵遊女が原因をなして居りました。ひとり諸大名ばかりではありません。富豪巨商の家にも澤山騷動がありました。それを材料にして狂言を仕組んだのであります。どうせ芝居のことですから、見た目を綺麗にする必要がありまして、大袈裟に誇張を致します。それには大名高家の家に起つたことにするのが一番適切でした。元祿人は一體遊里をわが家のやうに致すのが名譽面目と考へてゐたのでありますから、御家騷動物には、元祿の中年頃から必ず廓場を設けて見物人の請けるやうにし、若殿樣が其の遊女に無中になつて、古金買をする、今のばたやのやうに落魄した所、すなはち略と申す所をして見せたものであります。近松門左衞門が、とかく斯樣に綴り、坂田藤十郎が之を上手に演じ出したのであります。そこへ七三郎が江戸からやつて來て、藤十郎の向ふを張つて、廓場を眼目にして芝居をしたのであります。始はさう認められませんでしたが、黃金は誰が見ても黃金でして、どこに置いても光を放ちます。遂に大評判になりまして、藤十郎は固より見巧者な上方人をしてあつと云はせてしまつたのであります。複雜な筋ですが、ざつと紹介致しませう。

諏訪家の後妻の伴子利根五郎は泉州堺の遊女三浦に耽つて、身請をしようといへば、いやだと申します。そこで繩をかけて、封をつけて歸ります。廓の者は困つて、諏訪家へ訴へて出ました。家老の花岡和田右衞門が、裁判のために出て見ますと、三浦といふのは、自分と末を契つた傾城の葛城です。そこで其の不實を詰りますと、若殿は此のお屋敷の方とは知らなかつたと申しますので、事が面倒になつて、和田右衞門は追出され、三浦をつれて其所を立退きます。こゝで三浦は、遊女には「まことのうそ」「うそのまこと」といふものがあると說明しますが、それが名高いせりふであります。さて和田右衞門は落ちぶれて駕舁になり、作兵

衞といつてゐます。今しも堺の禿文字野を乘せまして、合棒の七兵衞とかついで來ますと、女房が來て、家に急用が出來たから歸つてくれと申しますので、あとはよろしくと七兵衞に賴んで作兵衞は歸ります。駕は一人では舁けませんので、文字野をおんぶして參ります。しますと路次の中で「にくやにくしと思へばいとし我にひとしき人しなければ」と歌ひます。七兵衞が文字野にすゝめてお前も謠へと申しますと、「今日とくらせし飛鳥の川の、ナウサテ幾夜ナンナン馴染も變れば變るよの、朝別れ」と遊女の身の上を謠つた歌を謠ひます。すると路次から老女が出て來て、其の歌をお姫樣にもつと聞かせてくれと賴みます。お姫樣と申すは諏訪家の先妻の子でありまして、此の人には小笹巴之丞といふ許嫁があるのですが、巴之丞は遊女狂の爲に勘當をされてゐるのでした。姫は其の勘當が許され、自分と夫婦にして貰ひたいと願をかけ、折節淺間觀音御開帳があるので參詣に來て、貸間を借りて滯在してゐるのでした。駕舁の七兵衞は所望されて、傾城買の振をしますと、文字野は振はよいが姿が惡い、此の小袖を貸さうといつて包の中から出しました。見れば七兵衞が先頃馴染の遊女奥州に、形見に見ろといつてやつた着物でした。そこでお前は誰か、自分は奥州と契つた小笹といふものだ。それでは巴之丞樣か、奥州樣はこなさんに逢ひたさに觀音樣に願をかけ、此の小袖をあげさつしやるのだと語ると、お姫樣は「あなたが小笹巴之丞樣か、わたしは諏訪家の音羽の前です」と名乘ります。これも願をかけに來たのだと聞いて、巴之丞は姫の志に感じ、こゝに足を駐めることに致しました。すると、禿はおう暑いといつて氣絶しました。胸へ手を中てて見ますと、暑い物がありますので引出して見ると、守袋で、中には巴之丞が奥州と取交した起請文が這入つてゐました。これか、こんなものはもう入らぬと、側の火鉢の中へ入れますと、ぱうと燃え立ちまして、其の煙の中に奥州の立姿が現れました。さうして、「恨も戀も殘らねど、もしや心の變りやせんと思ふ疑はらさん爲の誓紙をば、なぜに煙となし給ふ。恨めしや」と二上りの歌に合せて、散々に恨を述べます。このが大いに請けたものでして後の狂言に隨分取入れたものであり此の光景を淺間模樣と申しました。常磐津節を地の所作事にも、富本節を地の所作事にも清元を地の物もありまして、就中富本節のが名高く、明治に入つても演じたもの

でした。又駕舁が禿を乘せて來て、振で廓話をするといふのが、後の常磐津の名曲戻駕色相肩のもとになつたものでありました。芝居の上では忘れられない狂言です。

さて禿には人を附けて廓に歸し、奥州は身請をする事にして、巴之丞は後室に面會をすることになります。利根五郎は、諏訪家を乘取らうとしてゐまして、巴之丞のいとこを一味に加へて姫と巴之丞を殺さうとして露現しました。巴之丞は利根五郎一味と戰ひ、一先づ姫を伴れて邸を立退きます。これが上之卷です。

中之卷は廓場です。家老の和田右衞門は遊女三浦と同棲して十何年、おさんといふ娘が出來て、もう十三歳になります。此の夫婦が才覺して巴之丞を見ついで居りますが、巴之丞は又放蕩を始めて廓の金に困ります。和田右衞門は大切な大小を賣つて、廓の拂の金をつくりました。今しも巴之丞が廓の者を伴れて來るといふので、三浦がもてなしの酒を買に行つた留守に、相長屋の浪人が押込んでおさんを殺して其の金を奪つて行きました。三浦は歸つて驚きました

が、さて何とも仕方がなく、自分の身を廓へ沈めて其の金をつくることにし、和田右衞門は三浦をつれて、廓の者と一しよに廓へ參ります。跡には巴之丞と阿呆な下男ばかりです。阿呆からおさんが浪人に殺されたことを聞き、これもみんな自分から起きたことだと後悔して、既に腹を切らうとしましたが、阿呆からそれよりも、おさんを殺した人を討てと敎へられます。さうして常々之を欲しいといつたのにやればよかつたといつて笛を佛前に捧げて拜みます。此所が人を泣かせた愁歎場です。子は殺された上に、女房を廓に沈めてまでも主人に忠義を盡す、これが當代人の心でありまして、忠孝は地に落ちてゐませんでした。それなればこそ此の芝居の四年後に、かの忠臣藏の事件赤穗四十七士が出たのであります。

愁歎場の次は、陽氣な廓場です。三浦には早速身請の客がつき、困つてゐる所へ巴之丞が尋ねて來ました。巴之丞の馴染の遊女奥州は此の家に瘧を煩つて寢てゐるのです。巴之丞が藥を呑ませようと茶碗についでやると、奥州は怒つて茶碗を投げてこはします。巴之丞は茶碗のかけらを拾つて、碁盤島の羽織を

脫いで、碁盤に見立て、碁にことよせて、あてこすりをいふ。これが見物に大請けに請けました。結局仲直りが出來ましたが、そこへ揚屋の亭主が出て可笑味の場があり、巴之丞が三浦に愛の詞をささやきますと、三浦は怒つて巴之丞の脇差を拔いて、斬つてしまふと追ひまはします。和田右衞門が其處へ來て話を聞いて、これも腹を立て草履で散々に巴之丞を打つて辱かしめます。奧州が之を見て憤り、巴之丞に代つて腹を切らうとすれば、巴之丞は三浦の身請をとめる手段だ。之を見ろといつて、下に着てゐた出家姿を見せた。和田右衞門が面目が無い腹を切らうといふ所へ、おさんを殺し金を盜んだ浪人が編笠を被つて、大手を振つてやつて來ました。それ彼奴だといふので、和田右衞門は巴之丞の刀を借りて見事に之を討取りました。これが中之卷で、廓の表裏二面を遺憾なく見せてゐる芝居です。これが大評判でした。

下之卷は利根五郎一派の惡巧派は科にあひ、姫音羽の前は巴之丞と夫婦になり、めでたく國を治めることになりまして、一同が淺間觀音の御開帳に參詣します。三浦がおさんの遺髮を納めますと、住持はよく似た話もあるものだと奧に向つて呼べば、死んだと思つたおさんが出て來て、かかさまといつて抱きつく。みんな觀音樣の御利益で、危い場を助けてこゝにかくまつて置いて下さつたことが分つて幕になります。

かう語ると、至極甘い狂言ですが、實はさうでなく戀の執念の恐ろしさや口說（くぜつ）や詰開義理の爲の身賣りもあれば、慘い殺しや、草履打もあり、復讐の場もあつてそれが自然に取入れられてゐます。此の狂言はどこで演じても評判がよく、諸方で繰返し繰返し演ぜられました。作者は中村七五郎自身だと申します。もし本當にさうならえらいもので、元祿の代表作を作り且つ演じて、敵陣の中に立つて榮譽を獲ました劇界の英雄は中村七五郎です。古劇談はこれで終ります。

一四　道成寺藝術

（昭和十二年三月ラヂオ）

「のどけさやしきりに錢がほしくなり」といふ川柳がありますが、どうやら其の季節に相成りました。それと共に思ひ出しますのは「鐘に恨はかずかずござる」といふ娘道成寺の文句であります。よつて思ひ出したを其のまゝ道成寺藝術についてお話をしたいと思ひます。と申しても、此の寺の沿革や現狀を申すのでなく、此の寺とは切つても切れない安珍清姫に關する藝術一切をかう名づけて述べて見ようと思ひます。

道成寺には道成寺緣起と申すものがありまして、安珍清姫の話を大分細かに述べてありますが、此の話にはもともと永々しい來歷がありまして、此の緣起の出來る前にも出來ましたし、後にも、此のお話を種にして仕組んだ草子すなはち繪卷物やお能や淨瑠璃や芝居や踊や長唄の類がございまして、其の何れもが女の執心の恐るべきことを示して居るのであります。ただ長唄だけは必ずしもさうではございませんが、他の藝術の底意は皆そこに歸着いたして居りまする。

此の安珍清姫の話は古く平安朝時代の中頃に出ました日本法華驗記に「紀伊國牟婁郡惡女」と題して載せてあり、これから三四十年後れて出ました今昔物語には、之を書き和げて「紀伊國道成寺僧寫二法華一救レ蛇語」と題して載せてあります。が、此の二つの書物は共に、かう敍してあります。一人の老僧と見目美しい若僧とが熊野參詣を致して、牟婁郡の或寡婦の家に宿りますと、寡婦が若僧に想をかけて、夜忍び寄つてかきくどきました。若僧は破戒を恐れて、兩三日待つてくれ參詣の宿願を果して歸り路には、ともかくも致さうと說き聞かせて立ちましたが、參詣をすますと、今度は別な道を通つて逃げ歸りました。寡婦は待ちかねて通り筋へ出て聞きますと、其の僧ならとうに別な道を通つて歸つたとのことに、欺かれたと知つた女は嗔恚の炎に身を燒いて、一念忽ち大蛇の姿となり、野山を分けて追ひかけます。僧は恐れて日高の里の道成寺に駈け込み、大撞鐘を下ろしてその中にかくして貰ひました。大蛇は其の鐘にまきつき、火焰を吐きかけて去りましたが、かはいさうに僧は燒き殺されて灰になつて居りました。さて

或夜のこと、道成寺の老僧の夢のうちに、二つの大蛇が現れて、どうか法華讀誦の手向を賴むと申しました。そこで讀んでやりますと、また或夜の夢に、一男一女が現れて、おかげ樣で我々は成佛いたしましたと述べたといふことにしてあります。

此の話はもともと外國種らしいのでありますが、私は先の方を急ぎますので、古い處には足を駐めず、能や歌舞伎になつてからのことを多少細かに述べることに致します。今申しました如く法華驗記や今昔物語では、かの若い僧はどこの何といふ名の僧か傳へて居りませんが、此の話は鎌倉時代に入つてからだんだん固定しました。鎌倉の末に出ました元亨釋書には、京都の近くの鞍馬寺にゐた安珍といふ名の僧だとしてあります。けれども何時の話だともきめてありません。それがこれから五六十年後に出ました道成寺の緣起になりますと、醍醐天皇の延長六年のことで、僧は奧州から來て牟婁郡の淸次莊司の許にとめて貰つたことにしてあります。話はこゝに固定したわけであります。緣起の出來ましたのは應永の末年で、其の時から五百年前が延長六年らしいのであります。もつとも道成寺の開基は文武天皇の御時といふことでして今から申せば一千二百三十幾年も前に建つたといふのであります。成程此の寺の境內から發掘しました古い瓦には、其の頃の物もあり平安朝時代の物もあり、鎌倉時代としていゝものもあり、古い事は確かに古いが、延長六年といふことは何を根據にしてあるかよく分りません。恐らくは法華經を依經とする天台宗に改まつた時とでもしたのであらうかと思ひますが、寺傳にはさう見えて居りません。ともかくもさういふ緣起が作り出されて、それが今國寶になつて居ります。

此の道成寺緣起と姉妹藝術で、これより一寸後に出たかと思はれるものに「日高川草子」がありります。一に名を「賢學草子」とも申します。繪卷物でありまして原畫は土佐光信の筆だとも土佐廣周が書いたのだとも傳へてゐます。應永七年に之を模寫したといふ奧書のあるものもありまして、確かに道成寺の緣起よりは古いものと認められます。其の荒筋を申せば、三井寺の賢學といふ坊さんが、出雲の大社に參詣をして夢の中に、お前と遠江の國の橋本の宿の長者の姫と緣を結ばせるとの御告げを聞いて驚き、佛戒は破り難いと決心をいたして都に

還りましたが、怖い物見たさに、橋本の宿をさして出かけました。さてどんな姫かと覗き見をしますと、また五歳の娘で乳母に抱かれて、表の方を眺めて居りました。賢學はいつそ今之を殺してしまつて、後の憂を絶ち、問ひ弔ひはよくしてやらうと思ひました。そこで突然進みよつて姫を奪ひ、劍で脇腹を刺して逃げました。ひどい疵でありましたが、典藥の力で姫は全快して容貌が年と共に美しくなります。此の姫が十六の時、母なる人が此の姫に都を見物せしめ、且づよい緣邊を見つけさせようと思つて、供人をいくたりもつけて都に上らせました。ちやうど其の一行が清水寺の觀世音にお籠をした夜でございます。賢學が觀音樣の御堂で姫に出會ひました。これより後賢學は姫に想をかけましてたうとう姫の宿所を尋ねて深く契をこめてしまひます。さて賢學はある時姫の脇腹に疵を見つけて其の由來をとひ、こゝに自分の身につきまとふ因果の免かれ難きを知つて、姫に仔細を物語り、汚れた身を清める爲に紀州の那智の瀧壺に於て、淨水を浴びるといつて別れました。姫の一念は瀧壺の前に姿を現しましたが、賢學は迷はずに行を了へました。その歸りの途々にも姫の姿が影のやうにつきまとひます。賢學は恐ろしくてたまりませんので、日高川に至つて舟人に賴んで逃がして貰ひます。すると姫の影は忽ち大蛇の姿となつて川を越しました。賢學は道ばたの古寺に入り、おろしてある撞鐘の中に身をかくしました。大蛇は追ひ來つて鐘に卷きつきます。しますと鐘は微塵にくだけ、大蛇は賢學をとつて日高川の深みに飛びこんでしまひました。そこで同宿の者がそこへ尋ねて行つて、後を弔つてやつたといふのが荒筋であります。これは繪卷物にもなり、世間で申す奈良繪本にもなつて遺つてゐます。

道成寺緣起は之を年々羽黑山から來る客僧といふこに改め、其の宿をしました眞砂（まさご）の莊司が、自分の娘に向つて戲にあの若い人がお前の婿樣だと語つて聞かせ、娘は之を信じて年頃になつてから客僧に結婚の督促をする。客僧が驚いて下向を待てとすかして逃げ、歸路は別にとつたが、やはり追蒐けられて日高川に近き道成寺の撞鐘の中にかくれ、焰でやきころされて灰となり、後此の二人は法華の功德によつて成佛するといふ筋にしたものであります。道成寺の鐘は古來からあつたのか無かつたのか不明でありまして、吉野時代にはあつたやう

にも傳へますが、そのあるべき鐘が無かつた時に、かう潤色された說話に相違ないと思ひます。

次に能の道成寺でありまして、作者は觀阿彌清次だとも、さうで無いと申します。前二作と同樣、女の執念の恐ろしさを物語るものでありまして、お能では鐘入の前に亂拍子と急の舞とがあり、鐘入後には祈の段があつて甚だ重いものになつてゐます。筋は御承知の通りで、道成寺の撞鐘が再建されて其の鐘の供養が行はれる日のことにしてあります。先づ道成寺の住僧が、今日の供養にはちとわけがあるから女人禁制であるぞ、女は一人も入れることはならぬと從僧たちに申渡してはひります。そこへ國の傍に住む白拍子がやつて來て、今日の御供養に舞を舞はせて貰ひたいと賴みます。從僧の一人がそれではこつそり舞つて貰はうといひましたので、白拍子はあらうれしやと言つて舞出しました。既に拍子を進めまして歩調を整へ、急の舞に入つて諸僧の眠つた隙を窺ひ、立ち舞ふやうに見せて狙ひより、鐘をつかうとしましたが、思へば此の鐘うらめしやと龍頭に手をかけ飛ぶよと見えましたが、忽ち鐘の中にかくれてしまひます。

それが雷か地震のやうな響を出しましたので、諸僧が目をさまして驚き騷ぎ、住持の僧にそれと告げます。住持は鐘の所に行き、これにはかういふ話があるのだといつて、委しく昔の話をなし、疑も無く其の女の執心が殘つて此の障礙すなはち妨をしたに相違ない。これから一祈り祈つて鐘を再び鐘樓へ上げようと謀ります。そこで一同で東方降三世夜叉明王、南方に軍荼利夜叉明王云々と祈ります。餘りに祈られて、撞かねど此の鐘が響き出し、引かぬに此の鐘が躍るよと見えましたが、程なく鐘樓に上りました。すると中から蛇體が現れました。かの白拍子は忽ちにして半蛇といふ恐ろしい面をつけ、下に着てゐた鱗形の着物を現はし打杖を手にして出て來るのであります。諸僧がますます祈り立てます。蛇體は一度はかつぱとまろびますが又起上つて、鐘に向つてつく息は、まるで火焰のやうでございました。が、遂に負けて日高川の深い淵に飛び入り、僧たちはやれよかつたとわが本坊に立歸るといふ筋で、手短かに申せば、道成寺に於て撞鐘の再建をした時に起つた後日譚にしてあるのであります。

能の道成寺は全く短時間に行ふ變身術を見せようといふのであつて、重い物

に取扱はれるのは江戸時代に入つてからのやうであります。同時に江戸時代には此の道成寺說話が喜ばれて、上方唄では昆布道成寺や男道成寺の如きふざけた物が出ました。殊に男道成寺では娘を男にかへ、鐘入りを蚊屋入りにしました。又淨瑠璃では宇治加賀椽に一段物の道成寺があり、義太夫の方にも用明天皇職人鑑の中に鐘入りの段が作りこんであります。五段とか七段とか全部を此の話で綴つたのは寛保二年に出た道成寺現在魚鱗で、此の作に始めて淸姫といふ名が出てきます。之を改作したのが日高川入相花王で、川渡りの場だけが、後々迄も演ぜられまして、歌舞伎でも人形振で近年迄致しました。もつとも歌舞伎では元祿年中から致して居りまして、森田座の三世道成寺以下出ることは隨分出ました。淨瑠璃の一中節などにも一寸とした物は語られました。けれども江戸時代の道成寺物としては何としても長唄の道成寺を代表者にしなければなりません。

長唄にも道成寺ものは幾つかあります。最も古いのは傾城道成寺、名高いのは百千鳥娘道成寺に京鹿子娘道成寺で、百千鳥の方は「さなきだに」と語り出すので一名「さなきだ道成寺」と呼びますことは、御承知の如くでございます。さうして普通、道成寺と申せば、京鹿子娘道成寺のことになつてゐますので、ざつと其の紹介を致します。寶曆三年始めて江戸の中村座で出し、爾來幾十百回となく諸方で之を演じたもので、最初に白拍子を演じたものは中村富十郎でした。但道成寺の匂のしますのは、發端に於て撞鐘再建供養の場へ、所の白拍子が來て舞はせてくれといふ所と、終の蛇體を見せる所とだけでありまして、能の亂拍子や急の舞のあたりは、一切白拍子のいろいろの舞を見せることになつてゐます。十分花やかに歌舞伎化したもので、先づ櫻の折枝をつり、大きな撞鐘を下げてある舞臺で、諸僧と白拍子花子との間に問答があつて、花子は高島田の上に坊主から受取つた金の立烏帽子をつけ、中啓を手にしてうれしやさらば舞はんとてになります。いよいよ踊りになりまして第一段に入ります。その謠ひ出しが「かねに恨は數々ござる」であります。これが終つて三味線入りの賑かな合方となり、第二段で烏帽子をとり去り、引きぬきで衣裝を改め、當世風の踊りにうつります。そこへ流行歌をとり入れて「どうでも男は惡性者」だの「どうでも女子は惡性者」な

どと謠ひます。次は第三段で鞠の段、第四段は花笠の段で、梅とさんさん櫻は何れ兄やら弟やらの所、次が戀の手習の段。それが終つて羯鼓の所作、山づくしの段になり、終つて鈴太鼓に持替へ、地方で「花の姿の亂髪」と唄ひますと、鈴太鼓を棄て「思へば思へば恨めしやとて龍頭に手をかけ飛ぶよと見えしがひつかづいてぞ失せにける」と鐘入になるのであります。そこで諸僧の祈、鐘の引上げ、白拍子花子の般若姿、押戻の見えで幕といふ順でありまして、皆樣御承知の通りであります。其の舞臺の如何に花やかで、しかも變化に富んでゐますかは申す迄もございますまい。

道成寺藝術は實に弘まつたものでして、琉球の組躍にもあります。江戸の初期の假名草子にもあり、中期以後の黄表紙やくさ草紙にもこれに模ねたものがあります。錦繪や羽子板、最近では木工ミシンで姫が僧を追ひかけて行く姿を造つたものまで出ました。此の他俳句や和歌や川柳の類にもありますけれども、其の一々にわたつては、餘りに繁雜になりますので、此の邊でおしまひに致します。何にしても佛教思想のしみわたつてゐる國民性にかなひました爲か、一千年もの長い間行はれて參りました。永い將來への持續性の有無については豫言出來ませんが過去を申せば此の通りで、歌舞伎では勿論のこと、お能でも道成寺と安宅を出せば必ず滿員だと申します。昨今もこれが演ぜられてゐます。花の盛りにはもつと演ぜられることでございませう。

一五　紀州道成寺宮子姫緣起和讃

引

筆硯四十餘年、必要に迫られては、和歌・俳句・唱歌・箏歌はいはずもあれ、謠曲・長唄・淨瑠璃等の文句も作つた。知命前後からは漢詩や漢文の試作もして、我ながら餘りにも多方面に亘つたのに驚いてゐる。然るに本年に入つて又和讃一篇を作り出すことになつた。全く豫期以外のことで、よしや事は敍し得ても信教の念の淺まなるを暴露するばかりであらう。古德の作が靈光を放つて千載の後までを照らすに對して、恥しくもあり、冒瀆の罪の免れ難きを感じて辭退しようとしたが、急を要する場合で、ことわるにも斷りかねた。

別の事情ではない今年四月上旬から、高島屋に於て紀州道成寺藝術の展覽會が開かれることになつて、同寺の院代小野廣海君が東上して、諸般の準備に當られた。同寺の國寶佛を始め、古什の數々が列べられ、名高い緣起繪卷も陳列される所の大がかりなものであつた。たしか三月二十六七日のことである。小野君が訪ねて來られて、二三日中に和讃を新作してくれ、文句が出來たら新に曲を附けて、開會當日に披露し、末永く用ひるつもりだとのことであつた。有難くは思つたが、他に然るべき人があらうと思つて御辭退を申した。すると「道成寺藝術といふ語はあなたが作製せられたのです。今度も御贊助を得て計劃したのです。道の爲、教の爲、奮つて筆を執つて下さい。なに二三日中でよいのですから」と、至極手輕に勸められる。私は和讃のふしは寺々によつて相違はあつても、人を導く上には至大の偉力のあるのを認めてゐるので、道成寺にはどんなふしが古來用ひられてゐるかを問うた。小野君はすぐ朗唱された。何が聲明に多年苦勞してゐられる方、しかも聲のよい方が、心をこめて謠はれるのである。どうして私をしてうつとりとさせないで置かう、まことに結構な曲調であつた。これなら古來の七五四句一節の形式を重ねればよい。殊に宮子姫の緣起とあれば、まだ曾て一度も作り出されてもゐないと思つて、たうとう引請けた。さうして翌朝一氣に筆を駛らせて綴つた。全く敍事につとめて、古格を脫し得ない

恥かしさは伴へど、かいやり棄てるのも勿體ないと思つて、國文視野の一隅を拜借する。

歸命頂禮觀世音
一度御名を稱ふれば
枯れたる草木も花の咲く
誓の程ぞありがたき

千とせ餘りの其のむかし
紀の國九海士の浦にして
海女の渚の生みし子が
頭に髪の無かりけり

みめ麗はしきみどり兒に
撫で慈む髪のなく
人の見る目も恥しと
泣き悲しめどかひぞなき

折ふし浦の海照りて
漁る業も營めず
渚は底を探らんと
千尋の海に躍り入る

搜りしかひも荒磯の
波に浮べる海女人の
亂れし髪に不思議やな
千手菩薩のおはします

紀州道成寺宮子姫緣起和讃

葦のまろやに居ゑまつり
信心肝に銘ずれば
うれしや愛子に髪生へて
忽ち丈にあまりけり

頃しも奈良の都にて
玉の宮居に巣くひたる
雀もたらす其の髪は
たけ七尺を超えにけり

かゝるめでたき髪もてる
女やあると求め出で
宮子姫とぞめし給ふ
鄙の浦わの海女の子を

雲居の姫の惱みをば
帝叡聞ましまして
日高に寺を建て給ふ
道成寺とは名をつきて

傳へて玆に百千歳
かの靈佛を胎内にて
丈二の立像おはします
恵の波を世に敷きて』

渚は海女の名
道成寺の本尊は千手觀音

一六　言なんぞ容易ならんや

——尤の草紙と薄雪物語の作成年代——

（昭和十二年三月稿）

新刊書の報告や、内外讀書界の傾向、乃至は總評、又は裝釘や挿繪等に就いて紹介するのが主である「東京堂月報」に、こんな記事を出しては「典籍之研究」へでも送るべきのを間違へたのではないかと認定される方があるかも知れない。所がさうではない。月報の卷頭數篇の文章は大きに讀み物の性質を具有してるのと、もう一つは東京堂が出版元である日本文學全史の江戸文學史の上卷の記事に關して、とんだ杞憂を二日間ばかり抱いた報告を致したいのである。

江戸文學史は私の擔當部で、標題の「尤の草紙」は刊記のあるものが、少く寛永九年と同十一年と、後れては慶安二年に刊行されたことだけを知つてゐた。然るに此の三月十九日から白木屋で行はれる古書卽賣會の目錄が郵送されて來たので開いて見ると、

尤の草紙　　寛永四年刊　　二冊

とあるので、びつくりさせられた。何も驚くには當らないではないかと思ふ人人もあらう。御尤だが、私にはさうはいかない。何となれば、此の書の刊行時よりも著作年代を檢討することが肝要だと考へ、それも内容の上から判斷するのが尤も正しからうと考へた。さうして心徐かに此の草紙を讀んだ結果、上卷卅九の「とをる物のしなしな」の條下に、

大橋長藏は三十三間堂を二千八百四十七矢をとをす。

とあるのに目を着けて、史籍集覽所收の「京都方廣寺三十三間堂通矢數」に就いて搜したら分つた。

古人には此の草紙を室町時代の作品のやうに說いたものもあるが、序文に慶長に入つてからの書であることが知らせてあるので、室町說は當然のこと棄て去るべきである。けれどもそれだけでは何時の作と定むべきかは說明されてゐない。然るに此の通矢數で說明された。といふのはかの三十三間卽ち六十六間の長距離を射通すことは慶長十一年の正月十八日に淺岡平兵衞が五十一

本射通したのが最初で、大橋長藏が射通したのは寛永八年四月十四日のことで、長藏は此の時にたつた一度だけしか射てゐない。その記事があるとすれば、寛永八年四月以後の作品であると定めてよい。それが翌九年六月に至つて刊行されたので、著作時代は八九年の交と斷定して江戸文學史の中に記述し、此の年代考定は些少なりとも從前の研究に一歩を進めた積りでゐたのであつた。それが此の目錄どほりに寛永四年の刊本が出て來たのでは、この斷定は最早許されない。自分のこれまでに見た本には悉く大橋長藏の通矢の記事があつた。さては見たのはみんな增補本であつて、初版にはあれが無かつたのか、至急其の本を手に取つて見たいと思ひ惱んで、一日一夜を過し、十九日の早期に白木屋へ駈けつけて見た。本は賣れずにあつた。さうして卷末に

寛永甲戌六月吉日書舍中野氏道伴刊行

とあつて、甲戌すなはち十一年の版であることが知られ、ほつと一息ついたのであつた。隙人は別だの、神經質も程加減にするがよいなどとひやかして貰ひたくない。世には早呑込の人があつて、卽賣會の目錄を根據として私の考定を疎漏だと反駁するものが出ないとも限らないのである。又其の尻馬に乘る人が出ないとも限らない。そんなことをされると、私も迷惑なら、文學史の版元も迷惑だ。よつて此の防禦線を張つて置く。

○

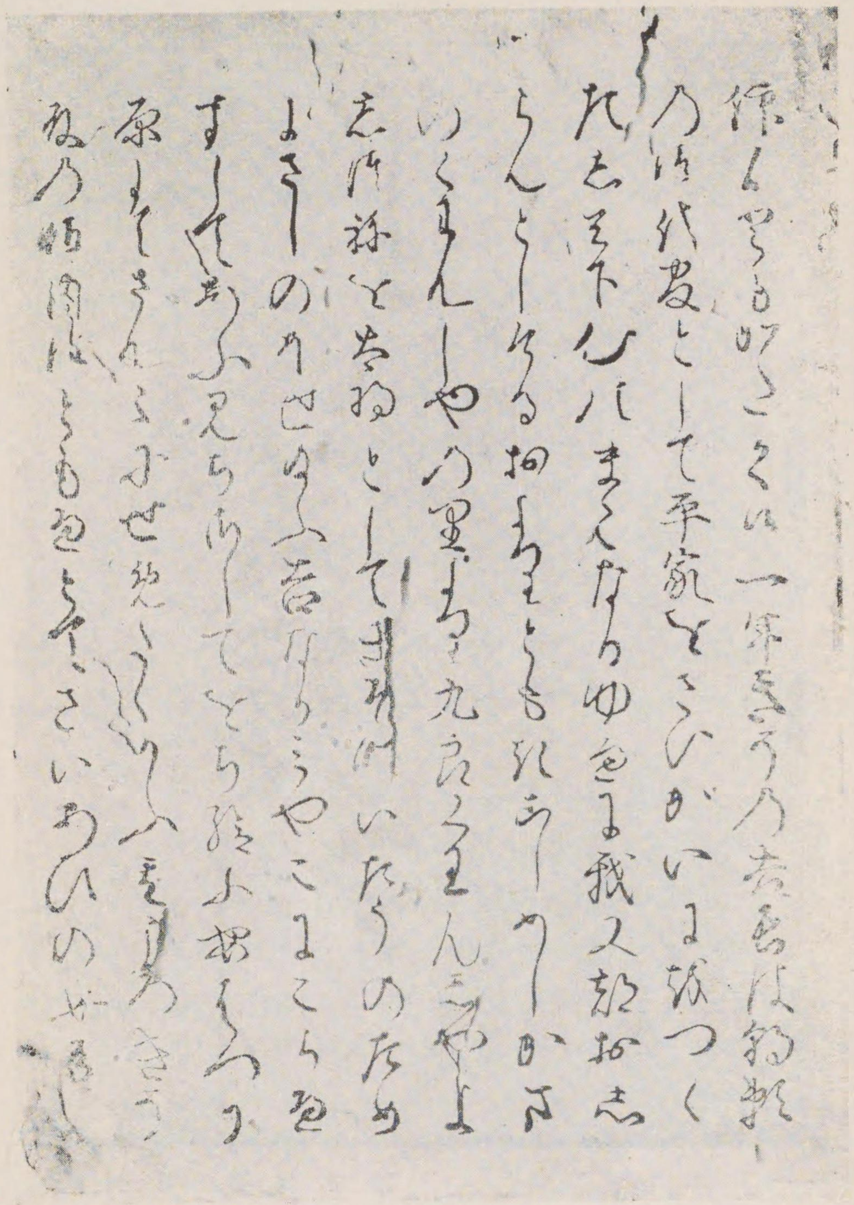
もう一つは薄雪物語の著作年代である。私は江戸文學史の中に此の書の刊行は寛永九年が最古だと記し、作成年代は此の書の高野詣の條に「飛行の三鈷地に落ち、しるしに植ゑたる一株の松、回錄の餘焰ほのかにたつて軒をこがせる御影堂」とあるのを、彼の慶長元年四月廿二日に瓦堂から出火して餘炎東西に蔓り、と高野春秋に見えるあの時の事だとして見れば慶長年中の作と見てもよからう。文詞は決して巧でなく、自作の和歌も稚拙を極めてゐる。蓋し恨之介に先立つて著作されたものであらうと記した。

すると、太平記の後代に及した影響を研究してゐられる史料編纂の後藤丹治君が、あの火災の形容は太平記の文句その儘だ、あてにならぬと、高野山の火災記錄を澤山列擧せられ、慶長元年のには詳かな記錄は無く、あつても御影堂があぶ

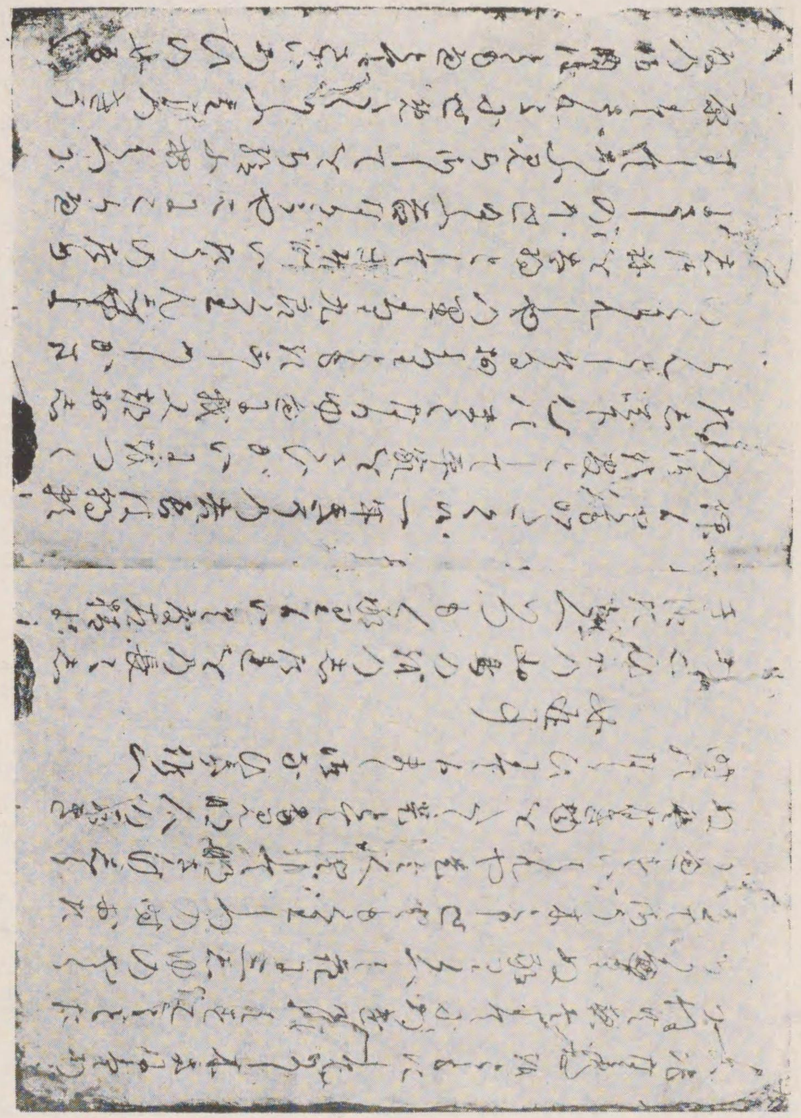
なかつたとは無くて、薄雪物語が慶長年中に作成せられたといふ説は信用し難い。やはり從來の如く、寛永を距ること遠からぬものといふ近古小説解題や、其の説を繼承して、恨之介草子より後に出たものだといふ普通の見方に從ふがよい。中にも水谷不倒氏は之を恨之介の模倣だと看做してゐられるといふ意見を「立命館文學」昭和十年十一月號の上で公にされた。それを良論文と見てであらうが、其の要を摘んで「國語と國文學」に寄せられた人もあつた。

私はあの火災の條は、太平記をお手本にして文飾をしたものだといふ説には異論がない。固よりさうなのだ。但私は七八年前に山科言繼卿の記であつたか、もう一寸古いものであつたかに、薄雪物語の文字を見出して、此の物語の存外古いのに驚き、其の内容は成程古くてもよいと思つてゐたのであり、其のうち少閑を得たら、さがし出して何かの誌上で後藤君に應酬しようといふ程度に考へて、忙がしいままに、忘れたといふのでもなく、忘れないといふ程でも無く過して來た。

天下は廣い。古書や古版物は搜ねたらまだまだかなり出さうである。さう



慶長板　薄雪物語



慶長板　薄雪物語

して今私の手許に、薄雪物語の慶長活字版一本ある。昨年のことだが、馴染の古書肆に立寄り、店頭の古書をかきまはしてゐると、古版物を十冊ばかり賣りに來たものがあつた。さうして特にぼろぼろになつてゐる一冊の書をひねつて、「御覽の如く慶長活字です」といふ。店主の横から見れば、成程疑も無く大字に屬する慶長活字の版で、柱にはウスユキ下とある。勿論挿繪はなく、本文は總べて平假名交り、いや交りといふより平假名の方がずつと多い。惜しいことに刊記のあるべき卷末が一葉缺けてゐた。鑒識に富む店主は、のどから手の出る程の欲しさに任せ、先方のいひ値で買取つた。さうして全く未見の珍本だといふ。本當に珍本である。そこで私は店主のいひ値でそれを買ひ求めた。

もう、これだけ述べたら十分であらう。寛永を距ること遠からぬとは、五年のことか、十年のことか、大抵其の邊が限度であらう。薄雪物語の最古版としては寛永九年版の繪入本が知られてゐた。それを起點として溯つてのことであるから、せいぜい元和年間位の見當であらうが、その頃に作成されたものが、もつと前の慶長活字版本にあるのでは、徒然草にある小野道風が書いた和漢朗詠集と

同しで、當に以て笑話の材料になりさうである。もつとも活字なら後世まで遺つて寛永になつても、正保になつても、印刷用に供し得る道理だが、整版隆盛の寛永に入つては活字版は甚だ少く、且つ慶長平假名の二字活などは餘り行はれなくなつてゐるやうだ。少しでも古版に通じてゐる人なら、慶長版と元和初年版との區別には迷ふことがあつても、寛永版とは混同するやうなことは無い。ともかくも手許の古版本を寫眞版にして挿入し、四方の博雅に御相談を致して見る。先づ比較に利便を圖つて、恨之介草子にもある美人揃のある頁と、活字版特有のあて字や倒植のある頁とを載せる。文の上には大差がない。委しいことは後日に又述べるであらう。此の活字本で、刊記のある薄雪物語が出たら、それこそは珍中の珍として尊重すべきである。あつたら何卒御垂教を願ひたい。

添へて申し上げて置く。家藏本の寸法は慶長版たることを許す大きさである。活字體の奇古稚拙などは改めて申さない。もう一ついひ添へて置く。知人に話して見ても、薄雪物語のそんな古版には寓目したことが無いといふ。又水谷不倒氏に尋ねたら、薄雪物語を恨之介草子の模倣だといつたのは、何も深い考があつてのことで無い。見方によつては薄雪の方が古いともいへると言ひ直してよこされた。これだけは後藤君の耳に入れて置きたい。恨之介草子も最古版は小字の活字版で、挿繪は無論ないが、活字の體も植字も大きに進歩してゐて、元和年間の印行では無いかと思はれる。しかし文の中身は簡古で後の繪入本とはひどく違ふ。

凡そ江戸初世の同一著作にあつては、繪入整版本よりも繪の無い活字版の方が先に出てゐるのだが、薄雪物語の活字本は、一見しても恨之介の活字本より古い。後藤君は「高野博士のいはゆる慶長年中著作説は根據が極めて薄弱である」から信用は出來ぬ」と結論されたが、私からは取敢へず以上の事だけ申し上げておく。確かにお公卿さんの日記中にあつたと記憶してゐるが、其の記事を見出し次第改めて「後藤君説の再吟味」と題して一文を草するであらう。それまでは御參考までに此の文を綴つておく。虚心坦懷に考へて戴きたい。天下は廣い。古書古版本はどこに伏在してゐるか分らない。言なんぞ容易ならんやである。日夕史料に接してゐられる後藤君は敵に鹽を送つた古英雄の態度に模ねて、古

記から當方に取つての有利な文字をも見出されて、世に紹介されることを切望する。

一七　近世學者の業績

（昭和十一年十月廣島文理科大學講演筆記）

私は江戸文學史著述のため、二三年來江戸時代の漢學者及び國學者の業績に就いて考査する必要が生じ、ぽつぽつ群書渉獵中の所、突然一場の講演を需められて、便宜此の標題を選び、二三時間の中に說述することにした。近世は江戸幕府三百年間と定め、學者は漢學者及び國學者に限り、蘭學者には言及しないことにする。言及したいのだが、それには相當の時間を要し、且つ目下叫ばれてゐる國體明徵の上には、さしたる關聯を有してゐないので、一時省略して、國漢兩學者の業績のみに就いて述べる。

朱子學の興起

先づ漢學者の方面から述べるが、傍ら漢學諸派の主張に觸れ、其の沿革にも囑目して說くことにする。德川家康の學事奬勵によつて漢學は國學よりも夐に

先立つて勃興した。それは家康が藤原惺窩の學説に傾聽した結果で、惺窩の説く所は宋の程朱の學説、すなはち朱子學であつた。朝廷の儒者は漢唐の古註を奉じてゐたので、之を新註と稱して其の流布を阻んだが、家康は之を一笑に附して朱子學説を弘めさせた。但し此の學説には佛説が加味されてゐて醇乎として醇なる儒教學説では無いのである。さうして新註とは呼ばれても此の學説の傳來したのは古かつた。早く鎌倉幕府の中葉寶治元年には陋巷子といふ人によつて、論語集註十卷が刊行された。多分宋または元へ渡航した僧の持ち歸つたものを複刻したのであらう。これが朱子の集註である。爾來細々ながらも此の朱子の註に基く解釋は、次の室町幕府時代にも行はれて來たのであつて、それが冷泉家の後裔なる惺窩によつて改めて唱道せられたのである。惺窩は一時僧であつた時代、渡明計畫を立てゝ薩摩に下つたが、風波に阻まれて、玄昌文之の訓點法を土産にして京都に引返した。けれども元來が英物で、門下から林羅山・松永尺五・堀杏庵・那波活所等の逸足を輩出せしめた。さうして惺窩は漢籍だけでなく、國書の研究にも力めて、神代紀の改修に着手した。これはずつと後に平田篤胤によつて著はされた「古史成文」の先蹤だともいへるのだが、朱子學説に誤られた所があり、慶長敕板の神代紀が出板されると共に中止した。詰る所惺窩の功は創唱にあり、多くの弟子を學壇に送つたことにある。殊に羅山は惺窩の推擧を以て幕府に仕へ、博學を以て帷幄の參謀となり一方には學事の振張を圖つた。官威を振りまはしたのは缺點だが、朱子學を天下に弘めたのは此の人の功績である。

さて儒教の長所は教化と實利すなはち修身・齊家・治國平天下といふ方面にあつて、それには申分は無いが、同時に禪讓放伐といつて大偉人には帝王の位を讓り、德を缺く帝王は伐つて滅してもよいと説く。これが我が國體に背反する大缺點である。幕府に仕へた儒者たちは、ひとり羅山のみに限らず、天に二日なく、國に二王なしといふ主張は出來ない。ただ正面から覇道を辯護せず、また露はにそれを非難することもなし得なかつた。羅山の後裔は其の後永く儒官になつたが、其の子孫には我が國を以て吳の太伯の後だなどと書き記すものが出た。それは本朝通鑑に見えるが、愚陋きはまる暴言妄説で、爲に此の書は永い間刊行

せられなかつた。けれどもこれは朱子學を奉ずる諸人の考では無く、此の學派の中に入れて見るべき

山崎闇齋學派

では、大いにわが國體を擁護した。闇齋は卓見達識の人で、後に神道を加味して垂加流を超した偉人である此の人が今彼土から孔子を大將とし、孟子を副將として我が國に攻めて來たら、諸子はどうするかと門人達に問ひ、啞然として答へる者の無い時、我は甲冑をつけ刀槍を持つて之と戰ひ、彼等を擒にする。これが孔孟の道だと說いたのは周知の話で、闇齋派の學者はいつも國體擁護の說を傳へて來た。但し之を奉ずるものは比較的に尠く、總じては朱子學が全盛で、諸藩の學校も多くは朱子學派のものが督學の地位についた。さうして碩學も多く此の學派から出た。殊に松永尺五の門人木下順庵の門下からは達識英邁の新井白石、樸實眞儒の室鳩巢、篤學不退の雨森芳洲、詩賦拔群の祇園南海等が出て、元祿時代の漢文界を飾つたのであつた。但し他に朱子學派とは對蹠的のものが無かつたのではない。

陽明學派

がそれである。近江聖人中江藤樹が三十五歳にして王陽明全集を見て感じ、はじめて知行合一說を唱へたのが此の陽明學說である。藤樹は天性、熱と理智との所有者で、此の全集を見て、はじめて朱子學に對する疑ひが解けたのであつた。はやく羅山の幕府に仕へて僧形になつたのを攻擊して「儒を說くに徒に其の口を飾り、佛氏の法に倣つて妄に其の髮を剃る、正路を舍てゝ而して由らず、朱子の所謂よくものいふ鸚鵡也。しかして自ら眞儒と稱する也」と手ぴどく非難をしてゐる。羅山の子鵝峰は藤樹を惡んで、それに迫害を加へようとした事は石川丈山に與へた尺牘の中に見えてゐる。然るに藤樹は慶安元年に四十一歳で歿したので之を免れた。

門人の熊澤蕃山は傑儒であつて國學にも通じてゐた。備前侯池田光政に用ひられて、利用厚生の經濟の學に長じてゐた。活眼英邁の士である。かつて某

侯の許で由井正雪とすれ違つて、互に注目して別れたが、正雪も彼人は遠ざけよと某侯にいひ、蕃山も亦正雪を近づけ給ふなといつたといふが、英雄は英雄を知るといふものだ。蕃山は儒者中の英雄であつた。爲に忌まれて、任を辭して退かなければならなかつた。退去の後は京都に住んだ。明石侯が之を信任された。その明石侯が封を古河に移されて、共に古河に移り、遂にこゝで歿した。全く林家が政權にたよつて、排他主義の下に學統を維持した其の犧牲となつたのである。蕃山を忌んだものは餘の者ではない、林家であつたのである。

元祿を稍降つた寶永正德といつた時代は漢學がますます榮えて、朱子學以外、陽明學以外に、一派を立てるものが相續いだ。先づ擧ぐべきは

古學派

と總稱すべきものである。其の先行者は山鹿素行である。林羅山の門からは出たが、兵學の大家で、一たびは赤穗の淺野侯に仕へ、辭して江戸に歸ると、勢望隆隆であつた。はやく朱子の學說を疑ひ、聖教要錄を著して幕府の咎に逢ひ、再び赤穗に幽閉せられたが、感化は藩の上下に及んで、長矩の元祿の異變には四十七士を出さしめたのであつた。かの義士の行動は全く山鹿素行の感化である。其の學說所見は山鹿語類幾十卷の中に述べつくされてゐる。

次は伊藤仁齋である。此の人も宋學すなはち朱子學說を疑ひ、三十七八歲にして大學は孔子の遺書にあらずと說いた。京の堀河に塾を立て、講說四十年、門弟子は三千人の多きに上つた。其の子が東涯で、子々孫々が其の家學を傳へた。仁齋は全く師傅なくして大成し、終身仕へず、當代比類のない篤行の人であつた。次は古文辭學派の創說者荻生徂徠である。最初は朱子學派に屬し、四十九歲の時、新正の詩に「五十今春未何知伯玉非」などと氣焰を揚げ、蘐園隨筆ではひどく仁齋の說を駁して名をなしたが、一二年にして轉じて古文辭學を唱へた。其の主張は明の李于鱗や王世貞に導かれたといふのだが、模擬剽竊を免れないのが此の派の短所であつた。それでも徂徠はさすがに大才の人で、詩文も書も巧みで一世に仰がれた。門下生は甚だ多く、經義派と詩文派とに分れて一時天下を風靡させたが、兎角に操行よりは詩文を重んずるといふ惡傾向が增長した。漢

土尊崇も度を超えて、徂徠が孔子の像に對して夷人物茂卿と記し、永く後世から非難されたことは餘りに以て名高い。

闇齋派の學者たちは全くこれに反してゐた。殊に淺見絅齋の如きは靖獻遺言を著して、熱烈に自國尊重の敎を垂れた。これより先、吉川惟足が之を說き、山鹿素行や熊澤蕃山等も儒敎輸入以前から我が國には固有の道なるものは存してゐたのだと述べて、自國尊重思想は擡頭してゐた。そこへ闇齋等が出て更に聲を大にして嚴かに主張したのである。而して更に更に其の主張を明白にしたのは

德川光圀修史の大業

である。それに參加したものは闇齋門の鵜飼錬齋・栗山潛鋒・絅齋門の三宅觀瀾であつた。これより前に光圀は朱舜水を招聘して居り、其の門人安積澹泊をしてこれに修史の一半を統べさせてゐたのであれば、强ちに朱子學派を排斥したといふではなく、皇國の名義大分を明かにしようといふのであつて、後の國學勃興も、尊王攘夷說も、遡れば皆光圀の大業に負ふ所が多く、更に遡つては山崎闇齋學派の所說に導かれたことが多いのである。修史とはいふ迄もなく、大日本史の編纂であつて、南朝正統の論と神功皇后を后妃に列し、大友皇子を弘文天皇と崇め奉つたことが主要眼目であつた。而して史眼の卓拔は潛鋒であつて「保建大記」の一書が永遠に光を放つてゐる。

しかしながら、一般人は太平の美酒に醉うて、徂徠學の詩文派に傾倒し、諸藩儒も大半はさうした人達であつた。けれども此の詩文派の作には淸新の致を缺くことがだんだんと觀破され、敎化や實利を度外視することが嫌はれ出した。さうしてこゝに

折衷學派

が起るに至つた。さりながら徂徠派を以て一概に迂遠な考の下に行動したものと解してはならぬ。徂徠に「政談」の著があり、春臺には「經濟錄」の如き名著があつて、經世の術策を論じたことに於て、其の方面の業績をも認めなければならぬ。

殊に春臺門の松崎觀海の如きは龜山藩の家老として實務の上に功績を遺しもした。たゞ此の一派が禮樂を以て治國の要道とし、雅樂の如き古いものばかりを尊重した一事に至つては到底賛意を表し兼ねる。

折衷學說も遡れば、朱子學派中の一二の人にも此の考が無かつたのではないが、先づ寶曆の頃、井上金峨の主張によつて起つたと見るがよい。其の說といふのは、漢唐の古註もよし、明淸人の新解註もよい、苟も勝れてゐるのは採り用ひようといふのである。金峨門下からは山本北山・山中天水・龜田鵬齋等學才の所有者が輩出して、徂徠學派を完膚無き迄に攻擊した。これから古文辭學派は大いに衰へて、それに代つて諸說が紛々として起つた。誰も知る細井平洲や南宮大湫も此の折衷學派に屬する人として見るべきである。

寛政異學の禁

然るに官學の宗家ともいふべき林家は代々大學頭にはなるが、無能者ばかりであつた。八代洲河岸の自邸が火元で、多くの類燒者を出した時などには「大學が孟子わけなき火を出して論語道斷珍事中庸」などとひやかされてゐた。時は田沼の政治時代で、綱紀は弛緩を極めてゐた。之を改める爲に執政となつたのが彼の松平定信で、柴野栗山と岡田寒泉とを登用して學政の更新に當らしめ、次いで尾藤二洲、稍後れて古賀精里を用ひ、朱子學を正學とし、他一切を異學とした。さうして異學の者は登用してはならぬと禁止した。これが寛政異學の禁で、徂徠學派以下はますます屛息した。さうして朱子學說に統一せられることになつたが、勿論この政策は偏狹に失してゐるので、反對者が續々として出た。其の巨頭が寛政の五鬼である。五鬼とは冢田大峰・山本北山・豐島豐洲・龜田鵬齋・市川鶴鳴の五人で、大峰は其の巨頭であつた。平洲の推薦で、名古屋藩校明倫堂の督學であつたので、三博士と呼ばれた栗山二洲精里などは相手にせず、直に執政の定信に迫つて、自己の學說主張を默認せしめ、著書の公刊を許可せしめた。先づ滑川談といふ一寸とした一冊物を出したが、忽ちの間に多數が賣れて、其の利益で庫を立てたのも著名な話である。又山本北山は始め小官吏であつたが、後には財を蓄へて典籍を購入し、當時在野儒者の旗頭の如き觀があつた。やはり經

營の才があつて、秋田侯其の他の爲に劃策して業績のあつた人である。通觀した所では朱子學派は比較的に經濟策が拙で、それに力を致さうともしなかつた。これが宋儒理學の立前といふ譯でもあるまいが、其の傾のあつたことは爭へない。私の見た所では、當時儒者はどの藩に於ても固より第一の學者であり、識見者であり、修身齊家の道を敎へる外に、藩利民福の法を講じて、それを實行させたもので、すなはち現實界に則してゐて、決して迂遠な學說や實用に遠い文字文章を敎へるものでは無かつた。然るに此の民福問題は、陽明學派、古學派及び折衷學派の中に其の劃策者を求め得られるのであつた。蕃山・徂徠・春臺・青木昆陽（伊藤東涯門）降つては北山及び細井平洲の如きは大いに推重すべき人であつた。其の劃策者は朱子學派の學者の中にも無かつたのではない。中井竹山、最も此の人は陽明學說をも奉じた人だが、「草茅危言」の如き著述を出して、大阪儒者だけに經濟觀を有してゐた。岡田寒泉は聖堂の敎官から出て代官となり、常陸幾萬石の地を治めて神に祀られる程の功績を擧げた。賴杏坪は名奉行と稱へられた。

折衷學の唱道された後には大した學派は出なかつた。强ひていへば

考證學派に獨立學派

位なもので、是等は穿鑿に失し、或は西洋學說を加味して其の學說は十分尊重すべきであつたが、藩利民福といふには緣が遠く、隨つて治績といふには與らなかつた。

江戸末期に入つては黑船騷、次いでは明治維新で、漢學者達も孔孟の道ばかりでは諸外國相手の方策は立たず、林家の如きは譏笑されても仕方が無いやうな迂拙極まる論議ばかりをしてゐた。此の際に於て活動したものは、やはり陽明學を奉じた者で、前にしては天保の大鹽中齋、後れては佐久間象山・吉田松陰・金子得所等皆陽明學派の人であつた。

漢學者の弱點

玆に漢學者達の業績を約言して國學者方面に轉ずるであらう。漢學者は實

用の文字文章を始め、修身齊家の法より藩利民福にかけて絶えず誘導をしたので、教化の上には少からぬ貢獻を致したのであるが、困つたことには根本義に於て、わが國體とは相容れないものであつた。禪讓放伐がそれである。僅かに山崎闇齋學派の人によつて皇國の道が說かれたのであつて、他は覇道をも是認するといふ態度に出なければならなかつた。何となれば江戸幕府を正面から攻擊することは避けなければならなかつたのである。卽ち我が國體を說いて國に二王なしと敎へることは出來ず、江戸の將軍を呼んで、大王大君國王などと書き記し、尊王の大義については顧みて他をいふといふ態度であつた。說く所は周公孔子の道で、我が國の古道については何の說く所も無かつた。其の最大緊要なことは神道學者の一部人士と、神道を加味してある闇齋學派だけであつた。此の學派の業績に關しては更に說き添へたい偉勳者がある。それは

山縣大貳

である。大貳は山梨の人、加賀美櫻塢の門人である。而して櫻塢は闇齋の門人三宅尙齋の弟子である。されば大貳は明かに闇齋學派の人だが、此の人に「柳子新論」といふ著作があつた。正名・得一以下の十三篇より成るが、これが些の遠慮もなく、覇道攻擊をやつて、尊王說を熱烈に主張してゐる。幕府は嫌忌して取調べて見たが、實行手段にまでは及んでゐないので重刑には處しがたい。そこで妄說を唱へて人心を惑亂したといふ名の下に斬罪にした。これは明和四年の事だが、此の人の講說を聽いた公卿や有志の心の中には「天無二日、民無二王、忠臣不レ事二一君一、列女不レ更二一夫一」の念が生き遺つた。國學者も此の說に刺戟せられたことが多く、本居宣長以下も覺醒せしめられたと信ずる。柳子新論が刊行されたのは明治十七年になつてからであるが、寫し傳へてはゐた。此の大貳の所說は幕府を震駭せしめたことは非常なもので、寬政五鬼の一人豐島豐洲の如きも、此の書を讀んだといふ理由の下にとらまれて、旗本の家から分家をさせられた程であつた。一言すれば漢學者中からは異端者の如くに目せられた者が、我が國體明徵の上に殊功のあつた人たちであつたのである。轉じて國學者の業績をいふ。

國學者の業績　荷田東麿の啓文

國學者は荷田春滿に起り賀茂眞淵・本居宣長・平田篤胤等によつて大成されたものである。春滿以前に我が國の道を說いた者が無いのではなく、僧契沖や北村季吟の如き人によつて古歌や古書は說明されたが、それに對して古學者と稱へて、國學といへば春滿以後の如くに考へられてゐる。

國學の意義は春滿の「創造國學ニ啓」に十分に示されてゐる。春滿が此の啓文を幕府に出したのは享保十三年のことらしい。此の當時は伊藤仁齋の古學說は大きに弘まつてゐた。徂徠の古文辭學も流布してゐた。儒敎の說く所は我が國體に合しないことも說明されてゐた。其の時になつて此の啓文を出したのであれば、春滿は全く後れ馳せであつた。此の啓文の稿本は今東羽倉家に遺存するが、春滿の門人山名靈淵の筆で、此の人はもと儒者である。勿論春滿の意を承けて立案したものであらうが、幕府の小納戸役の大島雲平宛に出したもので、家康を神君といひ、自分を臣東麻呂誠惶頓首頓首謹言とやつて居り、右の雲平を閣下と尊稱してゐる。加ふるに達筆の漢文で、春滿がこれだけ漢文が書けたら立派な作家である。又幕府への上書としては請取れさうもない文體であるが、少くとも雲平の手許までは出したもので、同人から折を見て將軍の御目にかけた事位はあつたらうと思ふ。それが老中たち執政官の評議に上つたかどうか其の點は明らかでない。斯樣な疑點はないでもないが、啓文の趣旨は立派なものである。歌學家が佛家の所說を借用したり、漢詩の上の所論に基づいて說くのを非難し、口傳祕訣なんどいふ妄說を退け、異端を排除して固有の古道を明らかにしようといふのである。異端とは禪讓放伐を認める儒敎と、一切を空だと說く佛敎とを指すのであつた。古道を知るには史書・神書の他に三代格や萬葉集古今集なども仔細に解釋して其の中に古道を求めよといふのであつて、國史・法制・歌文・語學の四科にわたつて研究せしめなければならぬといふことに歸着する。蓋し正當の見解であつて、國學なるものは此の四科以外に出てゐない。春滿の人物のしつかりしてゐたことは「踏みわけよやまとにはあらぬ唐鳥のあとを見るのみ文の道かは」と詠じた一首にも知られよう。惜しいことに早く歿

して、學校は建たなかつたが、門人の眞淵が其の志を繼承して古語の解釋に向つて大盡力を致した。萬葉集以下祝詞や枕詞に對しても伊勢物語や源氏物語古今集等の解釋にも成績を擧げた。けれども根は詩人氣質の人で、萬葉集の詩趣は斯人以上によく說いたものはない。詠歌も亦至極の名人であつたが、あまりに崇古主義に傾いて衣服や住居までも上代風にしようと考へ且つ相當に實行した爲に、國史方面迄は手が延ばせなかつた。門人の大多數も亦當時の田沼政治の下に弛緩してゐた江戸市民や江戸武士の頽廢生活に合流して、歌や文章にのみ傾いた。ただ伊勢の人荒木田久老と本居宣長の二人だけが歌文以外の神書古史に眼をつけた。この宣長をして古事記傳四十八卷を三十五年の間に大成せしめたのは眞淵の慫慂によつたものであつた。

本居宣長と平田篤胤の偉績

宣長先生の偉大さは改めていふを要しない。古道・國體・語學・註釋等のあらゆる方面に研究の手を及して、國學に對して堅固な基礎を築き上げたことは周知の事に屬する。物語に對して「物のあはれを述べたものに他ならぬ」と、文藝獨立觀を立てたことや、上古に於ける神に對して透徹した說明を下した等以外、どの著作にも識見が包藏されてゐた。國學樹立の大功は十の八九迄此の人の力になつたといつてよい。けれども法制に關しては手が及ばなかつた。法制は永く國學者とは緣が薄かつた。平田篤胤に至つて其の必要なことは大いに叫んだが、あの熱情家も自ら進んでまではなさなかつた。

宣長は蓋し學者であつた。比較考査をつくして、いはば歸納法によつて立論するもの、すなはち文獻立證派で、論よりも證據を先にして結論を下した人であつた。自然熱を缺いて、冷靜に判斷した處も多いのであるが、事苟くも國體や古道にわたれば、熱の昂騰を示して、宛も別人の如き觀があつた。

此の熱がもう一段高く、激越な語調、絕大な氣力、晝夜を分たぬ奮鬪を以て國史の解說に力を致し、古史成文、古史徵開題以下數十部の著書に於て、國體明徵に身血を濺ぎつくしたものは平田篤胤であつた。宣長は必ずしも現代を呪はず、佛說をも徹底的に嫌ひはしなかつたが、篤胤にあつては儒佛二教の說く所をあく

までも否認して、わが國を萬國の本源だと主張した。わが古道を以て世界無比の良道だと說いた。佛說を攻擊したものは出定笑語四冊だが、僧侶諸君が反感を抱いて讀み出しても、一たび卷を繙けば譬喩百出、辯難雋銳の痛快さに、面白く感ぜられて、思はず讀過してしまふといふ。一體大藏經を二遍も讀過したといふ精力絕倫な人であれば、途方も無い言說ばかりでは無かつたのである。

國學者の短處

國學は先づ以上四人によつて大成されたのであつて漢學者に缺けてゐた自國尊重思想は此の人たちによつて喚起され、浸潤せしめられたのであつたが、一般の國學者なるものは、徒らに古書や古歌文ばかりを耽讀して現代を賤しみ、その果は迂遠な言辭を弄するので「こそあんめれ流」などと輕視された。無理もないことで、彼等は實用に遠ざかつてゐたのである。經世眼は具有してゐなかつたのである。藩利民福は計り得られなかつたのである。實用文學は敎へなかつたのである。修身齊家の實踐道德を說かずに、明き直きまことの心を抱け、上代の簡素に復れ、それが惟神（かんながら）の道だと敎へたのである。文化は自然に進んで來て、いろいろの考、いろいろの道も開けて來たのである。それを上古に復へさうといふのであれば、時勢に逆行することになる。これがどうして爲政者や民衆に請け容れられよう。勿論請け容れない。そこで國學者は兎角文雅の人風流の人、世外の人、迂遠な人と目せられた。その世外な點が奧床しいと認めてくれはしたが、誰も目前肝要な衣食の道に指導をしてくれないものには歸依信服するものでない。其の結果大切な國體を說いてくれた大恩人に對しても、大先生達に對しては別だが、下端の歌よみ連に對しては、迂遠な呑氣な人とかう考へて來たのである。事實上に於て、國學者には、熊澤蕃山・野中兼山の如き人もなく、太宰春臺や其の門人の松崎觀海の如き經世の才のある人もなく、岡田寒泉や細井平洲の如き、賴杏坪の如き、適切な治民術を知つてゐるものもなければ、大鹽平八郎の如き果敢な實行家も無かつた。つまり藩政に參加して偉功を立てた人は無かつた。もともと經世策の相談を受けたものもなかつたのである。土佐の谷眞潮は相當な策を立てたといふが、此の人はむしろ漢學者なのであつた。本

居宣長が和歌山藩主から問はれて「祕本玉くしげ」を奉つたが、これも穩健な意見で、一向新味のない、通り一遍のものであつた。

國學と對立した漢學者の方には、詩文派と稱して專ら詩文に耽つた人たちがあつたことは既に述べた。國學者にもこれと同樣に考へられ且つ取扱はれたのが少くなかつたのであつた。

結語

江戸末期の黑船渡來は、全國を震駭せしめた。漢學者も國學者も相共に起つて、國事を憂へなければならなかつた。卽ち志士といはれなければならないのであつた。けれども尊王攘夷論の人たちも、開國論の人たちも、共に確乎たる信念を有して論ずるのでなく、やゝもすれば慷慨悲憤を事として、神國を汚すまいと極言するだけのことであつた。此の神國といふ考は、神道學者及び國學者の敎によつて知つたものであつたが、尊王の念に至つては、神道を加味してゐた山崎闇齋學派の人達、及び水戸の儒者たちであつて、特に此の時代にあつては、藤田東湖を巨頭としてゐたのであつた。他は賴山陽や梁川星巖等の詩文、とりわけ山陽の日本外史によつて養はれた精神を以て、君臣間の大義を考へ、國威の汚辱を恐れて奔走したのであつた。さうして如何にすべきかの適切な手段方法は、漢學者にも國學者にも說明してくれる者はなく、僅かに蘭學者中に一二あつた位で、岌々乎として危い事であつた。

幸ひにして、西洋諸國は、某々一二の國に、我が國に對する利權を獲得せしめなかつたので、それによつて均衡が保たれて、明治維新迄漕ぎつけることが出來たのであつた。明治維新に近接しては、國學者特に平田學說の信奉者から、國政の大方針に參劃する者が出た。漢學者出の人にも無い譯ではなく、當路の大官たちは、概ね漢學仕立の人であつたが、國學者側からも出たのは珍しいことであつた。それは大國隆正と矢野玄道とである。隆正は岩倉公の懷刀玉松操を說いて、神武天皇の古に復さしめようとし、矢野はもつと遡つて、祭政一致の古に復さしめようとしたのであつた。維新當時の政府當路者は、これに耳を傾けはしたが、實行はなし兼ねて、西洋風の輸入にのみ沒頭した。それが永く續いた、詰り、飜

譯制度、飜譯政治、飜譯學問、一言にすれば、模倣追從に日もこれ足らぬといふ情態であつた。明治廿二三年頃に、國粹論がわく頃迄の世情は、うそのやうに一切合財西洋崇拜であつた。當然のこと、漢學者の教化や國學者の國體說は忘れられて、兎角實利實益の方にのみ走つた。それも惡いのではないが、上古以來の美風良俗、近くは江戸三百年間に養はれた實踐道德上の教化效果までが忘れられて西洋でいふ倫理說が教へ込まれたのであつた。

爾來國情の上にも變遷があり、幾多教育上の問題も湧いた。さうして大事件が發生する度每にいつもいつも修身と國史教育の改善が叫ばれて來た。今もそれである。萬國聯盟を脫して自足自給で、世界を對手にしてまでも立たうといふ時に、今更に國體明徵などと、驚いたやうな聲の出るのはまあどうした現象であらう。

由來わが國に於ては、國語と國文と國史とは不可分のものであつた。それが西洋風に分けられたのであるが、天皇は萬世一系といふが如き國體は、歐羅巴のどこにあるのであらう。アフリカにたつた一つあつた。それが最近伊太利に征服せしめられたが、西洋諸國はそれを見殺しにしてゐた。さうして全くわが國と國體を異にしてゐる國に起つた所の考、所謂新思想なるものが襲來して、今でもまだどこやらにそれが潛んでゐるのであれば、やはり國體明徵の必要がないわけではないのである。蓋し過去數十年間の教育が、力の入れどころを誤つてゐ、且つ充實徹底を缺いてゐたが爲であるのではあるまいか。少くとも過去二三百年にわたる漢學者及び國學者の業績に顧みて、自國特有の教育法を施すべきを怠つた結果ではあるまいか。過去を有せずして現在のあらう道理はなく、現在がなくて未來のあるものではない。我等は現在と未來とに希望をつないで、積極的に進むべきものであるが、時折は過去をも追想して進路を定むべきである。これが國史や國文學史の必要な所以である。さうして國史や國文學史は其の進路を示すのが任務であらねばならぬ。しかるに事件每に修身や國史教育の改善が叫ばれるのでは、教育の道が充實してゐない證據ではあるまいか。但し之を修身國史の受持擔當者に向つて責めるのは不當であつて、教育なるものはいふ迄もなく學校と社會とに於ける啓蒙誘導卽ち實行の道への

總計であらねばならぬ。理科に當るものも、數學擔當のものも宜しく共同に責任のあるものとして考へなければならぬのである。漢學者が實踐道德と利用厚生とに力を用ひて、國體を說くことを重んぜず、國學者は國體國史は說くが、利用厚生の道を說くに疎かつた其の後をうけて、西洋流の功利主義を敎へ込んだ期間といふものは相當に永い年月であつた。氣がついて、法令の上だけでは改善の方針は明かに示されたが、實效が擧がらない。擧がらないも道理、いまいふ飜譯制度、飜譯政治、飜譯敎育の下に、他に類例のない所のわが國體を會得せしめようとしたのである。固より誤つてゐたのであるが、悔いて以つて改善すればよいのであつて、木によつて魚を求める程には困難な事業ではない。たとへ困難であつても爲すべきことは爲さなければならぬ。私は新しい國學者といふものゝすなはち新しい日本學者といふべき者が出て、偏傾のない良指導を敎育方面と一般社會とに向つて、萬遺漏のない敎を垂れてくることを希はざるを得ない。專門學者が狹い間口を奧深く突進するのもまことに結構だが、縱に向つてのみならず橫にも連絡をとらないのでは、團結といふ上に、破壞作用を及すだけではあるまいかと案じる。日本の現狀はその破壞を加へられては眞實に困るのである。當今、何科何學を擔當するものでも、自己の擔當學科をも多方面から考察して、國體の本義にまで考へを及して戴きたいと思ふ。私は決して偏狹な愛國心の下にかゝる言議を爲すのではなく、過去先哲の業績を考へて、今の學者先生方に、往昔を顧みて今日を知り、今日を知つて來日への導きをなすことを願ふのである。さうしてそれと共に日本現時の國情をもう一層お互に知ることが肝要であらうと思ふのである。生活の安定、これが何よりも差當つての問題であるが、之をどう解決したらよいか、私は漢學者及び國學者の業績と題して講演をしても、結局は此の問題に到達することを悲しまなければならぬ。

藝林逍遙　終

近世學者の業績

附奥遙逍林藝

昭和十三年十二月~~廿~~七日印刷
昭和十三年十二月~~六~~十日發行

定價貳圓五拾錢

著者　高野辰之

東京市麹町區九段一ノ七
株式會社東京堂專務取締役
發行者　大野孫平

東京市牛込區改代町二四
印刷者　田中末吉

東京市麹町區九段一丁目七番地
發行所　株式會社　東京堂
振替東京二七〇番
電話九段(33)四一一〇番
四一一九番

(理想社印刷所)

日本文學全史

全十二卷

文學博士 佐佐木信綱
文學博士 五十嵐力
文學博士 吉澤義則
文學博士 高野辰之
文學博士 本間久雄
共著

豫約刊行中
內容見本進呈

文學はあらゆる意味で、一國文化の象徵である。それは、その國の一般民衆が、その時代々々に於て、何を惱み、何を憧れ、何を苦しみ、何を求めたかを、最も端的に表示したものだからである。一國の文學史は、この意味に於て、あらゆる歷史の精髓であり得る。吾等は、實にこれを學ぶことに依つて、始めて最も妥當に、最も直截に、その國民の精神生活の跡を辿り得るのである。

今日の我が日本が、將來に於て更に一層の飛躍と發展とを敢てする爲には、何よりも先づ、過去三十年に亙る我が文學の歷史を精細に檢討することを以て、その急務の一つとする。かくすることによつて日本文化の眞髓を把握することなしには、一切の飛躍も發展も、つひに空疎に終ることを免れないからである。

吾等が、日本文學研究の領野に於て、現代日本の持つ最高權威者たる五先生の熱心な援助の下に、こゝに『日本文學全史』の刊行を企てた微意亦こゝに存する。卽ち重ねて云ふが、吾等はこれに依つて、日本文化そのものの相（すがた）を最も正當に認識し、その現れを最も豐潤に鑑賞し、その本質を最も的確に把握し、そして又、かくする事に依つて、吾が當來文化建設についての誤らざる批判と、輝かしき希望とを贏ち得ようとするのである。

願はくは吾等の意のあるところを諒とせられ、絕大の同情と聲援とを賜らんことを、文藝家各位、敎育家諸彥、並びに日本文化に關心を持たれるあらゆる知識階級に向つて、衷心希ふものである。

第一卷　上代文學史　上卷　佐佐木信綱著
第二卷　上代文學史　下卷　佐佐木信綱著
第三卷　平安朝文學史　上卷　五十嵐力著
第四卷　平安朝文學史　下卷　五十嵐力著
第五卷　鎌倉文學史　吉澤義則著
第六卷　室町文學史　吉澤義則著
第七卷　江戸文學史　上卷　高野辰之著
第八卷　江戸文學史　中卷　高野辰之著
第九卷　江戸文學史　下卷　高野辰之著
第十卷　明治文學史　上卷　本間久雄著
第十一卷　明治文學史　下卷　本間久雄著
第十二卷　日本文學總論年表　吉澤義則著　高野辰之・本間久雄編

窪田空穂著　全二卷

古今和歌集評釋

（上卷）定價四・五〇
（下卷）定價四・八〇

わが和歌史の上で最も重要なる席を占めてゐる古今和歌集とは一體どういふものであらう。其本質、特色は何處にあるのか。この觀點に立つて改めて古今集を讀み直さうとする場合、古來より權威とされてゐる註釋書類が我等に答へるものは甚だ曖昧であつて、殆ど觸れる所が無いと言つても過言ではない。

著者は曩に「新古今和歌集評釋」二卷を公にして讀書界にセンセーションを捲起したが、更に「古今集」の註釋書類を通讀して前述の如き不滿を感じ、現代人として之を默視するに忍びず、遂に再び筆を取つて其評釋に沒頭された。

爾來營々四ケ年、著者の熱意は凝つてこの大著に結實し、今や上下二卷壹千六百頁の完結を見るに至つた。用意周到にして明快澄徹の評釋は此大著をして一氣に讀了せしむるの魅力を持つてゐる。本書出でて古今集の本質は始めて明確に把握し得るであらう。

窪田空穂著　新古今和歌集評釋　（上卷）定價四・〇〇　（下卷）定價四・五〇

坪内逍遙著

歌舞伎畫證史話

菊判上製挿圖入
定價三圓五十錢
送料廿二錢

歌舞伎はわが國體に次ぐ世界に於けるユーニークな存在である。こんな尨雜な、不思議な舞臺藝術は世界の他のどこの國にも、どんな時代にもなかつた。歌舞伎は野生のまゝの純然たる民衆藝術として、連綿三百年の間些かの中斷もなしに同じ系統を追つて進化し、而も縱横に發展した。で西洋諸國が前後千何百年もかゝつて、めい〳〵で分擔して、意識的努力の結果、やつと獲得した劇的要素の有る限りが歌舞伎には自然に、半無意識的に備はつてゐる。それだけに、其本質も、其歷史も複雜で、やゝこしくて、到底、言語や文章だけで之を釋明することは容易でない。況んや簡單に具體的に敍說する事をやである。著者博士夙に此點に留意せられ、幸ひにも傳存してゐる種々の古畫を利用し、一瞥下に三百年の進化を歌舞伎劇場の內外に亙つて、備さに看取せしむべく工夫された。畫證史話と題された所以である。而して其畫證は外國劇場のそれと比較にさへも及んでゐる。劇に關する研究書は內外とも近來頓に增加しつゝあるが、本著の如きは前例が無い。挿畫八十餘圖。

山口剛著

江戸文學研究

菊判八百頁上製
定價四圓八十錢
送料廿二錢

トエ2J-15

文學博士　高野辰之著　（忽ち再版!!）

藝淵耽溺

四六判挿圖多數入
定價二圓五十錢
送料十四錢

徳富蘇峰氏評……本書は高野博士還暦記念出版にして、如何にもそれにふさはしきものだ。一書の中に、書畫篇、演劇舞踊篇、追憶篇、主張篇などの分類あるが。然も其の全書の約一半は書畫篇もて埋めてゐる。記者は高野博士が博學の士であるを知ると同時に、書畫の收藏家であることを知つてゐる。（中略）成程流石に篤好のほどありて、本書に掲錄せられたる中にも、垂涎三千丈と云はざるも、二千五百丈ほどの物が、少くない樣だ。博士の淸福眞に羨む可し。而して是皆な兀々講說著作の餘、衣食の資を節して得たるものと云へば、博士が耽溺も亦た宜べなるかな。（中略）記者が一讀して健羨の情に禁へざるは、「涼を趁ふ」と、「山莊閑話」の二項だ。人間此の淸福あり、金章紫綬我に於て何かあらんやだ。（東京日日新聞より）

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black